※リメイク 白髪少年が赤い弓兵を召喚するのは間違いだろうか

ソラさん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

英雄を目指す少年とかつて英雄になろうとし、諦めた弓兵。これはこの２人が紡ぐ新たな英雄譚。

迷宮都市オラリオで英雄になろうとする少年ベル・クラネルとその面倒を見、そして英雄に仕立てあげようとする英霊エミヤ、果たしてベルは英雄になる事ができるのか。

てな感じで始めて行きたいと思います。

一応アーチャーはＵＢＷ後のアーチャーです。

作者はｆａｔｅはアニメしか見てないにわかなので自己解釈や間違いなどが多々ございます。もし此処は違うよとかあったらご指摘お願いします。

あとダンまちも原作は6巻までは持っていますが7、8巻とソードオラトリアは現在所持してないのでのちのち購入します。

あと作者は今年は受験生なので更新が遅いと思いますが御容赦下さい。

え、他の作品？知らんな

作者のＴｗｉｔｔｅｒです。　ちょくちょく呟くかもｗフォローお願い致します

←←←←←←←←←←←←←←

@ｓｏｒａ＿１２＿１

※１１／１９にタグ追加しました
※３／１５までこの作品は凍結

目次

リメイク前
プロローグ前編 ―― 1
プロローグ後編 ―― 4
1話～ファミリア探し～ ―― 8
2話～冒険者になるには～ ―― 13
3話～新しい力～ ―― 16
3話～アーチャーの腕前～ ―― 20
4話～初ダンジョン～ ―― 24
5話～いざ攻略へ～ ―― 27
6話～悩み～ ―― 30
7話～恐怖と出会い～ ―― 33
8話～情報～ ―― 36
9話～情景一途～ ―― 40
10話～出会い～ ―― 44
11話～怒り～ ―― 48
12話～驚きの出会い～ ―― 56
13話～覚醒前夜～ ―― 62
14～夢～ ―― 67
リメイク後
※リメイク　プロローグ前編 ―― 69
プロローグ後編 ―― 72
1話～ギルドを探して～ ―― 79
2話～剣姫との邂逅～ ―― 82

リメイク前
プロローグ前編

無数の剣が突き刺さる丘に赤い外套を纏った1人の男が座っていた。

「くそ!!　また小僧を仕留め損ねたか…!!」

その男――エミヤシロウは過去の己、つまり第五次聖杯戦争で遠坂凛にアーチャーとして召喚され、その聖杯戦争にセイバーのマスターとして参加している衛宮士郎を殺す事で過去の過ちを正そうとした。

結果は失敗に終わったがしっかりと答えは得れたはずだった。だが聖杯戦争が終了し、アーチャーが”座”へ戻るとその記憶は記録に変わり答えを得れた自分ですら記録なってしまい、何時までも答えが得れない。

彼は永久の時の中で何時までも世界の為に戦い続けなければならない。

そうなってしまったのも彼がまだ少年の時に正義(英)の味方(雄)なんてものに憧れ、それが他人の夢であり、その感情が偽物だと気付けずに幾度の戦場を両手に握ったその剣で駆け抜け、時には無償で命を救い、更には世界まで救った、自分の事など顧みずに。

彼は死に際にですらこう願った、もっと1人でも多くの命をいたいと。

そして彼は世界と契約し守護者へとなった。

守護者となった彼は人類の滅亡を避ける為に世界の抑止力として人類の敵となるものを殺した。唯ひたすら殺した、大の為に小を切り捨て。

そうして彼はやっと気付く、「俺のなりたかったものはこんなものじゃない」と、こんなものは守護者とは名ばかりの掃除屋ではないかと。だが時は既に遅く、守護者になってしまった以上辞めことも消えることも許されない。

先程も言ったが、せめて自分の様にはならないように過去の己を殺

す事でその過ちを正そうとするのだ。
「む、今回の召喚は少しばかり早いな」
アーチャーは自分が召喚されようとしている事に気が付く。
「お次のマスターは一体どれほど運が悪いのだろうな私の様な格の低い英霊なんぞ呼び出して」
自嘲しつつ召喚されたら早速ハズレを引いた運の悪い馬鹿者の顔を拝んでやろうと思いながらエミヤシロウは現世へと召喚されるのだった。

一体何故こんな事になったのだろうか。
僕は唯、夢を叶える為に迷宮都市オラリオに向かう馬車に乗っていただけなのに運悪く狼の群れに襲われてしまった。
周りの人はすぐに逃げたけど鈍感な僕は逃げ遅れてしまい狼の群れに囲まれてしまった。
もう何処にも逃げ道なんてない。
まだ夢に挑んでもいないのに死んでしまうのか……
「だ、誰か助けて!!」
さっき逃げた人達も助けには戻って来ないし誰かが助けに来てくれる訳でもない。もうダメなのかな、此処で死ぬのかな……

いや、まだ死ぬ訳にはいかないそうだ、僕は英雄になるんだ！　そして英雄譚の様な出会いをダンジョンでするんだ。
そう、こんなところで立ち止まってなんかいられないんだ。どうせ死ぬのなら英雄の様に戦って死のう。
近くにあった木の棒を拾い上げ僕は立ち上がる。
「さあ掛かってこい、お前らなんか僕が倒してやる！」
そう覚悟を決めた瞬間、目の前に目も開けられない程の光が発せられた。その光には狼達も怯んだようだ。
光が収まるとそこには白髪で褐色肌そして赤い外套を纏った1人の男が立っていた。
そしてその男は僕にこう言った。

「サーヴァント・アーチャー、召喚に応じ参上した。君が私のマスターか？」
「はい？」
思わず僕は間抜けな声をあげてしまった。

プロローグ後編

「サーヴァント・アーチャー、召喚に応じ参上した。君が私のマスターか？」

現世に召喚された私は早速決まり文句であるセリフを吐いた。

どうやら怯えているようだがマスターの確認を済ませてからでも問題の解決は遅くはないだろう。

「はい？」

……どういうことだ？　何故疑問に浮かべる。この少年が召喚したのではないのか？　そうで無かったとしたら生前の私の様に巻き込まれたというのか？

「あの、すいません。よく分からないんですがあなたは逃げて下さい。此処は僕が戦います」

戦うとはあの狼達となのか？　魔術師が狼なんぞに遅れを取るとは思えんが。

だが以前の私の様な例外もいるだろう。それに周りには壊れた馬車しかなく他に人もいない。

やはり彼が私のマスターのようだ。

「心配はいらないぞマスター、この程度の狗なんぞ私が屠って見せよう」

「え、で、でも…」

「いいから任せろ」

恐らくこの様な状況からマスターの魔力量はさほど多くは無いであろう。あまり投影（トレース）に使える魔力は少ないだろうから今後は気を付けるとしよう。

まぁ、こんな狗には遅れは取る私ではない。

「投影開始（トレース・オン）」

やはり干将・莫耶が私の手に馴染むな。

さて、さっさと片付けたしまうか。

「さぁ、掛かってこい！！！」

「ガルゥ……ガァァァァ!!!!!」

……

アーチャーの挑発に乗ったのか全部で7匹の狼達は一斉に襲いかかった。

「危ないです！逃げて下さい！」

こんなところに冒険者がいる訳がない、冒険者でない一般の人が叫うわけない。そう悟ったベルは声をあげたが、アーチャーはそれを聞き入れない。

寧ろ余裕の表情をして陰陽夫婦剣を構え……

『一閃』

そう表すのが正しいであろう。

思わず目を逸らしそうになったベルもしっかりと目に焼き付けた、一斉に襲いかかってくる狼達をアーチャーが一瞬で屠った。

あまりの早さにベルはアーチャーが狼達を避けたのだと思ったが素人のベルにもはっきりとわかる剣の軌跡が見えたので倒したとわかった。

「怪我は無いか、マスター？」

あまりの出来事にベルはボケっとしていて返事に遅れたがしっかりと自分の安否を報告した。

「おーい、あんた達大丈夫かー？」

遠くから御者が様子を見に近づいてきた。

「あ、はい大丈夫です」

「それはよかったよ……でも馬車がこれじゃオラリオまで乗せられないな、悪いが歩いていってもらえないか？ここの道を真っ直ぐに1時間位歩けば着くはずだからね、本当にすまない」

壊れた馬車を残念そうに見ながら御者はオラリオがある方角を指さした。

「それではいくぞ、マスター」

「え、は、はい」

ベルは状況がイマイチ呑み込めないまま歩いていった。

「あ、あのさっきは助けて頂いてありがとうございました！」

歩き始めて１０分が経とうとしている時にやっとベルがアーチャーに礼を述べた。

「いや、大したことではない、サーヴァントがマスターを守るのは当然の事だ。」

「えと、あなたはどうして僕の事をマスターと呼ぶんですか？あとサーヴァントってなんですか？」

「ふむ、やはり知らないか」

それから歩きながらアーチャーは説明した。

自分が聖杯戦争の為に召喚された英霊だということ、聖杯戦争がどのようなものでどう言った目的で行われているのかと。そして聖杯を手に入れると何が出来るのかを。

「え、ええと、そう言えばあなたの名前を聞いてないです。名前を教えてください。」

「名乗るほどの名前はないが私のことはアーチャーと呼んでくれ」

「それじゃ、アーチャーさんは英雄なんですか？だって英霊ですもんね、てことは生前は英雄だったって事ですよね!!?」

ベルは夢にしている英雄が目の前にいるのわかり、とても興奮している。

「君が私のマスターなのだから私に敬語を使わなくても構わない。それでは先程の質問に答えよう、私は英雄ではないそれについて詳しく説明しよう」

アーチャーは自分は英霊ではなく守護者だということ、英霊が生前偉業を果たしたのに対し守護者はどういったものなのかを説明した。

「わかったかね？マスター、私は英霊としての格は低い存在だ。それとマスター、君の右手の甲にある痣のようなものは令呪と言ってサーヴァントを律するものだ。全部で３画あり、３回使うともう使えなくなる、それと大雑把な命令だと効果が薄れて無駄になってしまう。まぁ、気を付けておいてくれ」

ベルはいきなり色々と説明され戸惑っている。
「それとマスター、どうやらこの時代の知識が聖杯から得られていないのだが、ある程度説明してくれないか？」
「わかったよアーチャー」
それからベルは迷宮都市オラリオの事や冒険者、ダンジョンや神の眷属（ファミリア）についてなどの説明を始めた。
アーチャーはどうやら自分が異世界に召喚されたという事実に頭を悩ませている。
そんなやり取りをしているといつの間にか迷宮都市オラリオに着いていた。
「それじゃあ、まずはファミリア探しだよアーチャー」
「了解したマスター」
２人は都市に足を踏み入れる。
こうして彼らの眷属（ファミリア・ミィス）の物語は始まったのだった。

1話～ファミリア探し～

1話～ファミリア探し～

「マスター、君はどのようなファミリアに入りたいのか？先程の話によると入るファミリアによって生業が違うのではないか？」

当然の質問だ。

ベルの入るファミリアによって自分のやる事は変わる。

「えっとね、一応ダンジョンを攻略するようなところに入りたいんだ」

「ふむ、そう言えばマスター、君はオラリオにくる前はどこにいたんだ？」

この質問はアーチャーにとっては唯の疑問でしかないがここにくる事になった理由はベルにとって少し答えにくい質問だ。

「うん、まずオラリオに来ることになった理由なんだけどさ、僕はここに来るまでである村でおじいちゃんと2人で暮らしてたんだ。おじいちゃんはよく僕に英雄譚や冒険者の話を聞かせてくれてたんだ、それから僕は英雄や冒険者に憧れたんだ！でもおじいちゃんが少し前に……」

「マスター、それ以上のは言わなくていい、大体の経緯は理解した」

ベルの祖父が亡くなった事を察したアーチャーはすぐに気を遣った。

そしてアーチャーはベルが生前の自分自身に似ていると思ってしまった。アーチャーは衛宮切嗣と交わした約束、ベルは祖父に語られたものに対しての憧れ、どちらも似て非なるものだ。

「マスター、先に言っておこう、英雄なんてものには憧れない方がいい、そんなものはならないほうがいい」

そこでアーチャーは警告をする。

まだ少年のベルに対しては酷だろうがそんなのは関係ない、またアーチャーはまた自分の様な存在を生み出したくないからだ。

「な、なんでそんな事を言うの!!？　既に英雄のアーチャーに言われても説得力なんかないよ!!」

納得のいかない事を言われ、大声を出すベルだがアーチャーはあくまで自分が居た世界で英雄になる話をしていただけで、この迷宮都市オラリオで英雄になれないとは言っていない。
「マスター、落ち着け。私は別にここではでは英雄になれないなんて事は言っていない」
「え、で、でもさっきは……」
「それは私の言い方がが悪かったな、すまない」
「べ、別にいいよ、アーチャーにも何か理由があって言ったんだろうし」
アーチャーが居た世界で英雄は1を切り捨て10を救い、10を切り捨て100を救う、そんなようなものだったがこの世界ではダンジョンに潜り、モンスターを倒しより多くの名声を得られ、周りに認められれば英雄になれるのだ。
確かに彼等は生い立ちは似ているもものそれから進む道が違う、人を殺めるのとモンスターを殺すと言えば分かり易いだろう。
「それじゃあ!ファミリアを探そう!」

……

「はぁ〜、またダメだったか〜」
また神の眷属の勧誘に失敗しちゃったよ。
さっきので何人目だ?ええと…50人?
「はぁ……誰かボクのファミリアに入ってくれる子供がいないかな〜」
おや、あんなところにヒューマンの2人組みがいるじゃないか。
1人は線の細い白髪の少年でもう1人はガタイのいい白髪の青年だ。
う〜ん……
なんかあの2人気になるなぁ〜

よし、後ろをつけてみよう！
出来るだけバレないようにっとね。
え？　それはストーカーじゃないかって？　ちっちっちっ、ボクは神だぜ？　なんだって許されるのさ！
どうやら彼等はファミリアの入団希望者らしい、だがファミリアのホームの門を叩いては門前払いされ、青年の方は受け入れられているけど断っているようだね。
少年と一緒のところに入りたいのかな？

少し時間がたったけどボクが数えただけで１０は断られてるぜ？
あぁ、少年のほうがとうとう座り込んじゃったよ。
そろそろ声を掛けるべきかな？
「やぁ、そこの君達。どうやらファミリアを探しているようだね。」
「えっと、君は？こんなところに１人で迷子なのかな？」
「……迷子みたいな目をしているのは君の方だろ？」
「先程のから誰かにつけられていると思ったらマスター、彼女は神だ」
「な、ぼ、ボクの尾行がよく見抜けたね、な、中々やるじゃないか」
「それで神が私達に何の用だ？」
ひ、ひぃー。
青年のほうから殺気がぁあああ！
ととと、しっかりとしないと神としての威厳が……
「ところで君達はファミリアを探しているんだろ？だったらボクのファミリアに入らないかい？ちょうど募集中なんだよ」
「え！入ります！入らせてくださいっ！」
「本当にいいのかい？　ボクのファミリアなんかで？」
「その通りだマスター、いくら入れるファミリアがないと言ってもこの様な怪しいファミリアに入らなくても」
「な！　怪しいとはなんだよ！　怪しいとは！　確かにボクのファミリアにはまだ誰も入ってないけどねぇ、決して怪しくなんかないぞ！」
あ、やってしまった……

「それで聞いた通りだがどうするマスター」
「……僕はそれでもいいです。僕達の事をファミリアに入れてください！」
「まぁ、私はマスターがそこでいいと言うならいいだろう」
やった、やったぞ！
遂にファミリアを捕まえることが出来たぞ！
「よし！　それじゃまずはお互い自己紹介だ、ボクはヘスティアだよ、よろしくね！」
「ほお、あのオリュンポス１２神のか、私の事はアーチャーと呼んでくれ」
へぇ、僕達の事を知っているなんて詳しいんだねぇ
「ぼ、僕はベル・クラネルです！　よろしくお願いします、神様！」
「それじゃ、君達。ファミリアの入団儀式をやるぞ！　ついてきてくれて！」
行き先はボクが何時も本を借りている書店、あそこの二階なら大丈夫だろう。
それじゃあ入ろう。
「やぁ、ヘスティアちゃん。ファミリアの勧誘だったらお断りだよ」
「違うっておじいさん、二階の書庫を貸してくれよ！」
「おうおう、ちゃんと本は読んだら棚に戻しておいてね」
「……こんなご老人にまでファミリアの勧誘をしていたのか」
「だってしょうがないだろ？　誰も入ってくれないんだよ！　それよりほら、二階に上がった上がった！」
むぅ、さっきからアーチャーくんのツッコミが痛い……
「それじゃ、まずはベルくんからだね、そこの椅子に座って服を脱いで」
「ふ、服ですか？」
「上着だけで大丈夫だよ、これから君にはボクの『恩恵』、つまり神の恩恵（ファルナ）を刻むんだよ」
「ベルくんはどうして冒険者になりたいんだい？」
「じ、実は僕、『迷宮神聖譚（ダンジョン・オラトリア）』に出てくるような運命の出会いに小さい頃

から憧れていて……」
「……マスター、君は英雄になりたいんじゃなかったのか？」
「英雄のそうだけど、出会いは偉大なんです！　男の浪漫ですよ？　僕の祖父だって『ハーレムは至高』と言っていました！」
「君、それは絶対育て親を選び間違えたよ」
「すまないが私も同意しかねるな」
「さぁ、今度は君の番だぞ、アーチャーくん」
「私には必要がない」
「な、それはどういうことだい!?」
「はぁ、それでは説明しよう」
そこからのアーチャーくんの説明は驚くべき事だらけだった。
自分はサーヴァントで英雄だなんて信じられないよ。しかもベルくんがマスターなんだって！
まぁ、下界には例外というものがあるだろう。
「まぁ、ダンジョンに潜る時は気を付けておくれよ」
「あぁ、了解した」
まぁ、面白そうな子供達が集まったもんだな。
君達はどんな物語（みちゃ）を歩んでいくのかな。
「……さぁ、ベルくん、アーチャーくん。頑張っていこうぜ。ボク達のファミリアはここから始まるんだ」
「あ、はい！」

2話～冒険者になるには～

2話～冒険者になるには～

「それじゃ、ボク達のファミリアのホームに行こうぜ！」
「は、はい」
ベルに神の恩恵（ファルナ）も与え終え、アーチャーの存在の事もヘスティアに教え、そのあとややいざこざがあり現在に至る。
「ところでアーチャー君、君がさっき説明してくれた聖杯戦争は、本来この世界で起こりうるものではないんだろ？」
「あぁ、聖杯から知識を得られていない以上そうだろうな」
「これはボクの勘なんだけどね、その聖杯が原因じゃなくて誰かがこうなるようにしたんじゃないのかな」
ヘスティアはただの勘と言ってはいるが、神の勘ほど不確かな根拠はないと言われているほど神の勘は当たってしまうのだ。
「ふむ、その線もあるな、マスターに召喚されてから今に至るまでにサーヴァントの気配は感じられなかった。まだ召喚されてないだけかもしれないが、その他のものにも気を付けるとしよう」
「うん、そうした方がいいかもね～」

入団儀式をした書店から歩いて１０分が経過した頃、ヘスティアが口を開いた。
「さぁ、君達ここがボク達のホームだぜ！」
「「……え？」」
目の前の有様に思わずベルもアーチャーも揃って声をあげてしまった。
ヘスティアファミリアのホームはどうやら目の前にある寂れた教会だと言うのだから。
「か、神様。　これは何かの間違いじゃないですよね？」
「いやマスター、これは絶対に間違いだ」
「なに言ってるのさ！　ここがボク達のホームだって！」

「まぁ、いや、うむ……後で私が直しておこう」
「え!? アーチャーそんな事も出来るの!?」
「造作もないことだ。 それより中に入るとしよう」
「それじゃあ! 案内してあげよう!」
ヘスティアは大声をあげて教会の扉を開ける。
中に入るとベルもアーチャーも予想した通りの荒れ具合だった。
これは手がかかりそうだ。と思うアーチャーであった。
「えっと、神様? ここにどうやって住んでいるんですか?」
「ふっふっふっ、よく聞いてくれたねベル君。 1階こそは荒れてるけど実は地下の部屋は綺麗なんだよ!」
「その地下の部屋とやらにはキッチンは付いているのか?」
「勿論ついているぜ」
「よし、それならばこれからは私が食事を作るとしよう」
「アーチャー君、さっき君はこの教会も直すと言ってたよね? なのに食事まで作れるのかい?」
「あぁ、特に問題なく出来る。何か不満かね?」
「い、いや〜、不満がある訳じゃないんだよ?」
「それにしてもアーチャーって色々出来て凄いね」

「マスター、先程説明し忘れていだが、サーヴァントにはステータスというものがあってな。 それはマスターのみ見れるのだが私のステータスの保有スキルのところを見てみろ」
「えっと……千里眼:C……魔術:C—……心眼(真):Bに……執事(バトラー):EX !な、なるほど……」
「理解したようだなマスター」
何故かアーチャーはすこしドヤっとした顔をしている。
「ま、まぁ、料理はアーチャー君に任せるって事にして部屋にいこうぜ」
「わ、わかりました、神様」

右奥のところにある階段を降りるとそこには3人、いや2人で暮ら

すのにはキツイ部屋が一部屋ある。
階段を下り、部屋を見たアーチャーは思わずため息をした。
「神へスティア、流石これは狭すぎではないか？」
「んー確かにそうなんだけどさ～、今までボクは1人で暮らしてたし狭いと感じた事はなかったんだよね～」
「神様！　そういえば冒険者になるには冒険者登録をしなければいけないんですよね？」
「あぁ、そうだよ」
ダンジョンはとても危険で冒険者の死亡者数が絶えない。
そこでギルドが設けられ担当の職員と相談しながらその冒険者に見合った階層の挑むというシステムが始まったのだ。
担当はダンジョンについての知識があり、冒険者はそれを教えてもらえる為、とても便利なのだ。
「それではマスター、ギルドに行くのか？」
「そりゃ行きたいけど、アーチャーはギルドの場所知ってるの？」
「あぁ、ファミリアを探していた時に偶然見つけてな」
偶然と言いつつも生前にやっていたＲＰＧゲームでの定番のギルドをしっかりと探していた抜け目のないアーチャーである。
流石は我らがアチャ男
「んーそれじゃあ、行ってきなよ～ボクは待ってるからさ」
「それじゃあ、行ってきますね神様！」
「夕飯までには帰ってきておくれよ、アーチャー君の料理を楽しみにしてるから～」
「ああ、任せておけ！」
こうして彼らはギルドへ向かうのであった。

3話～新しい力～

3話～新しい力～

あれから僕達はホームからギルド本部へ向かった。

道は分からなかったけどアーチャーが見つけてくれていたからとても助かった。

ギルド本部に到着していざ中に入ってみると、冒険者の多さに僕は驚いた。

「この人達は皆冒険者なのかな？」

「ああ、恐らくそうだろう、この物たちからは普通の人とは比べ物にならない力を感じる」

アーチャーとそんな会話をしつつカウンターへ向かう。

ああ、やっと夢へと近づけるのか。

僕はそう思いながらカウンターにいた茶色のショートヘアで緑色の目、そしてなりよりエルフ耳の綺麗な女性の人に話しかけた。

「すいません。冒険者の登録をしたいのですが、どうすればいいですか？」

「冒険者登録？　それじゃあ、ここの紙に名前と性別と年齢、所属ファミリアを書いてね」

「はい」

ええと、性別は男で歳は１４、ファミリアはヘスティアファミリアでいいのかな？

「書きました！」

「えっと、名前がベル君ね。歳は１４で……んーどうなんだろう……」

歳を見た時に悩み出したけどどうしたんだろう？

「何かあったんですか？」

「い、いや！　なんでもないよ。　登録して来るから少しあっちの椅子で待ってて」

「ああ、でもその前にこの後ろの人もお願いします」

アーチャーも登録しておかないといけないよね……

「え？　後ろの人？　それって誰？」

あれ？おかしいな。
振り返ってみるとそこにアーチャーはいない。
さっきまで一緒だったんだけどな……
『マスター、私はいるぞ』
「え？　アーチャー？　どこにいるの？」
周りを見渡しても何処にも見当たらない。
『いま私は霊体化をしている。安心しろ、しっかりと私はいるぞ』
でもなんで霊体化なんてしているんだろう？
「すいません、勘違いでした」
「いいよ、勘違いは誰にでもあるからね」
そう言うと微笑みながら彼女は奥の方へきえていった。
僕は椅子に座ってまだ霊体化しているアーチャーに話しかけた。
「アーチャー！なんで霊体化をしているの？」
『当然の事だ。私はサーヴァントとして現界しているからな、私が消えた時に記録が残っていると色々まずい』
確かにアーチャーの言う通りだ。
英霊――もとい守護者としてこの世にいるアーチャーについての記録が残っていたら色々とまずいだろう。
そんな考えをしていると僕の名前が呼ばれていることに気が付いた。
「ごめ～んベル君、待ったでしょ？」
声を掛けて来たのはさっきの綺麗な女性だ。
冒険者登録が終わったのかな？
「全然待ってませんよ？」
全く待ってないのは事実でまだ5分しか時間が経っていない。
「それじゃあ、冒険者ベル・クラネルの担当になりましたエイナ・チュールです。　改めてよろしくおねがいします。」
「こ、こちらこそよろしくおねがいします！」
この人が僕の担当か～、なんだか嬉しいな～
『マスター、彼女が担当なら私の姿は見せておいた方がいいだろう。しかしこのままいきなり姿を現したら問題になりかねない。そこで

私は買い物に行っていたということで外から入ってくる。その設定で頼むよマスター』
「わ、わかったよ」
「え？何か言った？」
「い、いやぁ～何も言ってないですよ？」
それにしてもアーチャーの細かい設定に少し驚いたな。
すると入口の方からアーチャーがこっちに歩いてきた。
「すまないベル、つい買い物をしていてはぐれてしまった」
「だ、大丈夫だよアーチャー、今冒険者登録が終わったところだから」
アーチャーが急に名前で呼ぶからすごく驚きだよ。
しかもなんか服装変わってるし！
黒のTシャツに藍色のジーンズそして黒縁メガネ……
どうしてこうなった？
「え、えっと、あなたは？」
「私はアーチャーというものだ。ベルが冒険者登録をすると聞いてついてきたんだ」
「そ、そうですか。あなたはもう登録を？」
「いや、私はしていないが私には必要がなくてね」
「必要ないって……ダメですよ！　」
なんだろう、全く付いていけない。
「私の事よりベルに何か説明するのではないのか？」
「う、あなたのことはまた後で言います。　それでベル君、君は武器と防具がないでしょ？」
「は、はい」
「ギルドの支給品ならあるけど使う？」
「いいんですか!?　なら是非使わせてください！」
「それじゃあ、どの武器にする？　片手剣？　槍？　それともナイフ？」
ん～どれにしようかな。
武器なんて使ったことないし……
……あ！　でも確か昔おじいちゃんがナイフの使い方教えてくれ

たことがあったっけ！
「それじゃあ、ナイフでお願いします」
「わかった。それじゃあ、準備しておくから明日取りに来て貰っていい？　その他にも色々と説明したい事ことがあるからね」
「わかりました！」
「それじゃあ、今日はもう帰っていいよ」
ナイフ……それが僕の新しい力か……
楽しみだな。
「それでは帰りに食材を買って帰ろうかベル」
食材？でも今１０００ヴァリスしかないんだよね……
「アーチャーさん？あなたはまだ少しお話があります」
「な、なに！」
エイナさんが物凄く怖い顔でアーチャーの肩を掴んでいる。

その後３時間くらい話してた結果。
結局冒険者としてアーチャーは登録されてしまった。

3話〜アーチャーの腕前〜

3話〜アーチャーの腕前〜

不覚……

あのエイナ・チュールという女性に乗せられ結局冒険者登録をしてしまった……

それにしてもあの怒りよう、どこぞのあかいあくまに似ていたな。

「マスター、それでは買い物をして帰るとしよう」

「あ、あのさアーチャー、今僕は１０００ヴァリスしかないんだよね……」

しまった、私としたことが、マスターの残金を計算に入れていなかった……

「むぅ、どうするか……」

ここは冒険者が集う街、オラリオだ。

つまり武器や防具が必要な訳だ。

鍛冶なら多少は出来るから今度やってみるべきか……

いや、それより今は食料費が先だ。

方法がない訳じゃないがあまり気が進まん。

「ど、どうしようアーチャー」

そんな顔をするなマスター、もういい、この際しょうがないか。

金がなければこの先どうしようもない。

街を歩き行く人々の中には冒険者がいる。

つまり武器を持っていると言うことだ。

宝具ほどではないにしろ中々上質な剣を投影(トレース)して売れば多少は金になるだろう。

む、あそこの男が背負っている剣がいいだろう。

まずはあの剣を剣の丘に登録しそして……

「――投影開始(トレース・オン)」

「え？　アーチャー？」

そして私の手にはあの男が背負っている剣がいつもの様に投影(トレース)さ

れていた。
「マスター、これを売れば多少は金になる筈だ。　売りに行くぞ」
「え、あ、うん！」
　ふむ、この剣は『ヘファイストスファミリア』が作ったのか。中々上質な剣だ。
　武器屋へ向かおうとした時後ろから男性に声を掛けられた。
「な、なぁ。　あんたが持っているその剣、あんたの剣か？」
「あぁ、そうだが。それがどうかしたか？」
　あからさまに怪しい。取り敢えず睨んでおくか。
「そ、そんな睨むなってな？　俺はよお、その剣が前から欲しくてよ。今日いざ買おうと思ったらもう店には置いてなかったんだよ。そこでだ、それを俺に譲って欲しい。　勿論金は出そう」
「ふむ、いくらで買い取る？」
「それはまだ新品か？」
「あぁ、まだ新品だ」
「そうか、なら買った値段で買い取るのも申し訳ないな……なら２割上乗せの１２０万ヴァリスでどうだ？」
　な、なに！
　そんなに高いのか!!
　私のステータスには黄金律は付いていなかったと思うのだがな……
「それでいい、それでは交渉成立だ」
　彼に剣を渡すととてもズッシリしていて大きな袋を渡された。
「ありがとよ！　俺の名前はシモン・フーリンだ。　縁があったらまた会おうぜ！」
　そう言うと彼は風の様に去って行った。
「な、なんだったの今の……」
　マスターも開いた口が塞がらないような表情をしている。
「マスター、私はこの世界の金銭感覚が分からないのだが、これはどうなのだ？」
「うん、それはね、めちゃくちゃ多いようん」

何故か罪悪感が湧いてくるな……

……

思わぬ収入があったところでベルとアーチャーは魚や肉、米や野菜等を買い、そしてあの寂れた教会を直すために色々な木材などを買い込み、そしてホームへ帰った。

「おかえり！　２人共!!」
　ホームに入るとヘスティアが大声で２人を迎えた。
「て！　なんだいその荷物は!!」
「ああ、思わぬ収入があったのでな、つい買い込んでしまった」
「そ、そうかい、それならいいんだけどね～」
『ヘスティアファミリア』には金がもう殆どない、それにこれからダンジョンに潜るとなるとポーションやら色々と準備しなければならなくなる。
　ヘスティアはそれを心配してあまり金を使わせないようにしたかったのだ。
「それでは調理を開始する。　暫しの間待っていてくれ」
　そう言うとアーチャーは厨房へと向かって行った。

　アーチャーが調理を始めて３０分ほどが過ぎた。
　どうやら完成したようだ。
「さぁ、席に着きたまえ。　食べるとしよう」
「こ、これをアーチャー君が作ったのかい？」
「な、なんだか凄いですね神様……」
　メニューは焼き魚、肉じゃが、白米に豆腐とワカメの味噌汁というありふれた日本食だがアーチャーが作ると一味違う。
「さぁ、食べてみてくれ」

「「いただきます」」
２人がそう言いながら食べ始めるとアーチャーも食べ始める。
基本サーヴァントに食事は必要ないのだがマスターからの魔力供給が少ないアーチャーにとっては少しでも魔力を温存しておきたいのだ。
「「う、うまい!!」」
ベルとヘスティアが同時に叫ぶ。
「ふふ、そうか。　ならよかったよ」

なんだかんで言って長い1日が終わった。

余談
その夜床に着いたベルは上で教会を修理しているアーチャーがなにやら叫びながらやっているのを聞いていて中々眠れなかったのはまた別の話。

4話～初ダンジョン～

4話～初ダンジョン～

「ふぁ～……」
眠い、ただ今は眠い。
昨日アーチャーが夜遅くまで教会の修理をしてたから五月蝿くて中々寝れなかったんだよね……
「アーチャーはどこにいるのかな？」
神様はベットでまだ寝てるけど、アーチャーが見当たらない。
「上にいるのかな？」
部屋を出て階段を上がっていくと急にいい匂いがし始めた。
どうやらアーチャーは朝食を作ってくれているんだな。
階段を登きり、部屋を覗くと驚いた。
昨日までは薄汚れていて住むなんて全く出来なかったような部屋が今ではすっかり綺麗になっている。
更に今まであった長椅子は今では2個しか置いておらず他はすっかりタンスやらベット、テーブルや椅子などに作り変えられている。
「おや、起きたのかねマスター、朝食は出来ているから神ヘスティアを起こしてきてくれ」
「あ、うん。わかったよ」
アーチャーってほんとにすごいなぁ。なんでも出来ちゃうなんて。
「神様！　起きてください！　朝ごはんが出来てますよー！」
「うぅ……後5分……」
「ダメですよ神様！　起きてください！」
「全く……しょうがないなベル君は！」
「しょうがないのは神様でしょ！」
「ん？それにしてもいい匂いがするな～、先行ってるぜベル君！」
さっきまで眠そうにしてたのに、現金だな神様は。
教会の変わりようにヘスティアが驚いていたのはまた別の話。

……

朝食を食べ終えベルとアーチャーはギルドへと向かう。
ベルの武器を取りに行くためだ。
ギルドに到着し、カウンターにいたエイナに話しかける。
アーチャーはエイナに多少苦手意識があるため霊体化している。

「あ、おはようベル君。君の装備が準備出来たよ」
エイナはそう言うとベルに短刀や鉄の胸当て、その他アイテムなどを渡した。
これらは全て合わせて８６００ヴァリスするのだが、アーチャーが今回限りは払ってくれるらしく、お言葉に甘えて買ってもらったのだ。
「ありがとうございます！」
「ふふ、それじゃダンジョンについて少し覚えとかないといけないことがあるからそれを説明するね」
２人は椅子がある方へと移動していく。
「まずはダンジョンについての基本知識ね。まずダンジョンはバベルの地下にある洞窟の事で、ダンジョンは何層にも連なっていて下の階層に行けば行くほどモンスターが強くなるの。　そこで自分の見合った強さの階層でモンスターを倒して魔石を集める。それをギルドとかにある換金所でお金に換金するの。　流石にそれぐらいはわかるよね？」
今エイナが話した内容は冒険者でなくとも知っているような基本知識だ。
「勿論です！」
「そっか、それじゃどんどんいくよ」
それからベルは3時間に渡るエイナの授業を受けていた。

主に教えられた知識はこうだ。
1層から5層までに出現するモンスターの特徴や弱点、各階層の特徴、迷った時にどうすればいいかなどだ。
「取り敢えずこの位覚えておけば大丈夫かな」
「は、はい……」
「ところでベル君、この後ダンジョンの潜るの？」
「えっと、一応そのつもりでいます」
「そう、ならまだ1層までにしておいてね、間違えても2層には行っちゃダメだよ！」
「わかりました！　ありがとうございました！」
ベルはお礼を述べてからギルドを飛び出す。　エイナはそれを微笑みながら見送る。

「ふぅ、それにしても彼女のあれは凄まじかったな」
「あはは、確かにあれはキツかったな」
バベルに向かう途中、アーチャーが姿を現し、ベルに話しかける。
アーチャーもあの場にいてしっかりとエイナの説明を受けていた。
「うわぁ……まじかで見るとバベルって本当にデカイなぁ」
どうこう話している間にバベルに着いた。
「それじゃ行こうかアーチャー！」
「あぁ、了解だマスター」
こうして彼らの初ダンジョン攻略が始まったのだ。

5話～いざ攻略へ～

5話～いざ攻略へ～

「うわぁ、結構暗いなぁ」
「足元に気を付けたまえマスター」
　彼らは現在薄暗い階段を降りている。ダンジョンへと続く階段だ。
「大丈夫だって、そういえばアーチャー、なんで今日は赤い外套を着てないの？」
　今アーチャーは何時も着込んでいる赤い外套を着ておらず、黒の甲冑のみを身に付けている。
「あぁ、それならただ目立つからという簡単な理由だ。大した意味はないよ」
　彼が持つ赤い外套は『赤原礼装』といい、彼がとあるカレー好きの聖職者から譲り受けたものである。
　それはとある聖人の聖骸布から作られたものであり、外敵からではなく外界から守る効果があるため実際に身に付けていても全く意味がないのだ。
「ところでマスター、1つ確認して起きたいことがある」
「え？何？」
「君はこのダンジョンに何を求める？」
　この問は至極簡単だがそれ故に答えは難しい。
　ダンジョンに何を求める何をするのか、ベルによってアーチャーの対応も変わってくる。
「……僕はダンジョンに出会いを求める！　そして僕は英雄になりたい!!」
「ふ、前半はともかくいい答えだ。　よし、ならばマスター、君が主に戦闘をしたまえ。　私は戦わん、たがアドバイスは与えよう」
「え……うん、わかったよ」
　あの質問でベルの答えが腑抜けたものだったらアーチャーはある意味ベルを見捨ててたであろう。

だがアーチャーはベルの答えを聞いて決心した。
彼を英雄に育て上げると、かつて自分が諦めたものをベルに託すと。
アーチャーが決心したところでようやっと1層へ到着した。
「マスター、これからはいつ戦闘が始まるかわからない、 気を抜くな」
「わかったよ!」
まずは道は1本しかなく、ただ真っ直ぐに進むのみ。
真っ直ぐ進んで行くと二手に別れる道になる、ようやくダンジョンらしくなってくるのだ。
彼らはそこの道の右を選び、歩いていく。
そうするとダンジョンの暗闇からひっそりと人型のモンスターが出てきた。
そう、ダンジョン最弱のゴブリンだ。わかりやすく例えると某ＲＰＧゲームに登場するあの青くてプニプニとしたモンスターと同レベルというかんじだろう。

「マスター、まずは君の実力を見せてくれ」
「わかった! よし、いくぞ!」
ベルは臨戦態勢にはいる。 たがベルには戦闘経験がなく、とても隙だらけだった。
ゴブリンがこちらを視認して襲いかかってくる。
「うおぉおおお!!!」
ゴブリンが襲いかかるのと同時にベルもゴブリンに向かって走り出した。
ゴブリンの攻撃をベルはジャンプで後ろに回り込んで躱し、ゴブリンのがら空きになった背中を短刀で斬り裂く。
そして致命傷に耐えられなかったゴブリンは消えていきその場には1つの小さな魔石が残っていた。
「や、やったー! ゴブリンをたおしたぞ!!」
「おめでとうマスター、なかなかいい戦いぶりだった 。」

「ありがとう、アーチャー。　この事を神様にも報告しないと！」
「だがマスター、まだダンジョン最弱のゴブｒ……」
　そこまで言いかけたアーチャーは気付く。ベルはまだ少年だ、そんな彼が喜んでいる時に真実を伝えるのは酷ではないかと。
「い、いやマスター、君が今日は終わると言うならそれでいい」
「それじゃ、行こうか！」
　この後ベルがゴブリンをたかが１匹倒してホームに帰った事を後悔するのはまた別の話だ。

6話～悩み～

6話～悩み～

はて、どうしたものか……

初めてダンジョンに入ってから数日、彼――アーチャーは悩んでいた。

その内容はマスター（ベル）の事である。

ベルからの魔力供給が少なければベルに何かあった時助けられない。

そしてアーチャーはベルに魔術回路が何本あるかを確かめてみた。

すると驚く事にベルには魔術回路が1本もなかったのだ。

それではどこから魔力供給されてるのかという疑問が出てくる。

だがその件については既に解決済みである。

ベルがヘスティアに授かった『神の恩恵（ファルナ）』のステイタスの項目には魔力という項目があり、そこの数字が魔法が体現していないにも関わらず24になっており、恐らくそこから供給されている。

ステイタスについては後ほど説明しよう。

聖杯戦争での召喚の原理とは違うが元々イレギュラーな召喚なのだからうなずける。

だがアーチャーが今悩んでいるのはそこではないベルが成長するにつれてステイタスも強くなる。

そこでアーチャーへの魔力供給量は増えるのかというのがアーチャーの悩みだ。

だがそれは実際にベルが成長してからではないとわからない。

例え強大な敵と戦う事があったとしてもアーチャーには魔力の少なさを補える技術がある。

悩んでいても仕方が無いな、そう吹っ切れるアーチャーであった。

……

ボクは今悩んでいる。
何時もお世話になっている神様へのプレゼントについてだ。
昨日、ふと神様の髪飾りを見てみるととても傷んでいるように見えたからプレゼントをしようとしたんだけど何がいいか中々決まらないんだよね。
エイナさんにも相談したんだけど中々決まらないんだよな。
アーチャーに相談するのも考えたんだけどアーチャーはそういうの向いてなさそうだよね。
「マスター、どうかしたのか？」
「え、い、いや何でもないよアーチャー」
「そうかならいいが、唯でさえ収入が少ないのだからな、おかしな事には使うべきではないぞ」
え!!なんでその事知ってるの!!確かに神様のプレゼントを買うために毎日の収入を少しずつ抜いてるけど……アーチャー恐るべし……
こうなったら一応アーチャーにも聞いてみようかなぁ……
「あ、あのさアーチャー、神様に髪飾りをプレゼントするならどんなのがいいと思う？」
「ふ、そんな事か。　安心しろマスター、神へスティアは君からのプレゼントならどんな物でも喜ぶぞ」
「そ、そうかな？」
「あぁ、そうだ。　だから君が彼女に合うと思う物を選びたまえ」
「分かったよアーチャー、ちょっと僕買ってくる！」
「了解した」
やっぱり僕が神様にプレゼントするんだから僕が決めないとね！
……
時は夕暮れ、アーチャーが何時ものように夕飯の支度をしている。
その匂いにつられ今まで眠りについていたヘスティアが目を覚ます。

ベルは早速贈物（プレゼント）を渡すべく、ヘスティアに挨拶をした。
「神様、その…これを」
「……え？」
ヘスティアに差す出すのは1つの小箱。　その中には二つの髪飾りが入っており、それは蒼い花弁を連想させるような飾りのリボンに小さな銀色の鐘が付いている。
「ベル君、これって……？」
「神様の髪飾りが傷んでいるように見えてその、それに最近元気がなかったようですし……」
「それでこの頃帰ってくる時間が遅かったし、その割に収入が見合ってなかったのか……」
「え、ええと。無闇に言うべきではないと思いまして……すいません！」
「ふふ、それじゃ君からのプレゼントだ、君が付けておくれ」
「え？　あ、はい！　わかりました！」
ベルは髪飾りを受け取るとヘスティアの後ろに周り、現在付けられている髪留めを外し、ツインテールにまとめていく。
「似合うかい？」
「は、はい！　とても似合ってますよ！」
「ふふ、そうかい？　それじゃアーチャー君が作ってくれた夕飯を食べに行こうぜ」
「はい！」
ヘスティアは嬉しそうな顔をして地下部屋の階段を上がっていく。
そしてその髪飾りについていた鐘がリン、となっていた。

7話～恐怖と出会い～

7話～恐怖と出会い～

ダンジョンにはやはり出会いを求めるべきだと思う。
アーチャーにはやめておけと言われたが、やはりこれだけは諦めきれない。
だがそんなことより今大事なのはダンジョンに出会いを求めるにはダンジョンから実力が求められる。
何故そんな話を今しているのかと言うと……
「うわぁあああああ!!」
『ブモォオオオオ!!!』
絶賛逃走中である。
なんでこんな事になったかって言うとあれはほんの5分前……

確かあの時はダンジョン探索が進むもんでつい調子に乗って5層に降りていつも通りコボルトやゴブリンを倒してたんだ。
「アーチャー、僕は向こうの方にモンスター湧いてないか見てくるから魔石の回収をお願い」
「了解だ。　あまり奥に行きすぎるなよマスター」
そう、この会話の後だ、そこで僕はやらかした。　何故かちょっと調子に乗って奥深くに行ってしまい、曲がり角をふとみると、そこに牛人（ミノタウロス）がいた。
普通ミノタウロスは中層である15層あたりから出現するはずなのに上層である5層には絶対に出てくるはずがない。
それれ逃げ回って現在に至るというわけだ。
ていうかそれにしても……
「しつこい！」
『ブロロォ!!』
あーもうそろそろ足も限界が……
ズコッ！

「へ？」
石につまずいたぁあああ!!
そういうのは本の世界だけにしてよ！　しかも後ろが行き止まりって、逃げ道ないじゃん!!!
「う、うぅ」
あ、あぁ……
どうしよう、アーチャーは!?　しまった、今頃探してるだろうけどここにはいない……
ぐ、そんなニタニタした顔で近づいてくるな!!
「こんな事なら5層になんて来なきゃよかったよ！」
あ、そうだ令呪でアーチャーをここに呼べば！　確か使うにはこうやって……
「れ、令呪をもって命ずる……」
ズササッ！
『ブモォ!?』
え？
急にミノタウロスが細切れに……
「あの……大丈夫ですか？」
思わず息を呑んだ。
僕の目の前に金髪の美人、もといＬｖ．５、第１級冒険者【剣姫（けんき）】アイズ・ヴァレンシュタインその人が立っていた。
やはりお爺ちゃんの言ってた事は間違ってなかった――――否、ダンジョンに出会いを求めるのは間違ってなかった。

……

マスターに指示をだされ、魔石を回収しているとこのザマだ。
まさかマスターを見失うとは思ってなかった。

「く、何をやってるんだマスターは!?」
まずは状況整理だ。
魔石を回収し始めたのはおよそ2分前、ここからさほど離れてはいないはずだ。
さらにマスターは、来た道を戻って行ったのだから方向はわかっている。
ならその方向にある微量な魔力を辿れば見つかるはずだ。
「……見つけたぞ！」

……

アーチャーがベルを見つけ、追いかける。
するとアーチャーの目の前から全身が赤黒い生物が走り通る。
「な、何だったんだ今のは……」
とても気になったアーチャーだが今はマスターの安全が第1なので急いで先にすすむ。
すると目の前に女剣士が立っており
、その目の前にはそこそこの大きさの魔石が落ちていた。
「すまない、ここいらで白髪頭の紅い目をした兎の様な少年を見なかったか？」
「えっと……それ子なら向こうに走って行ったけど……」
アーチャーに呼び掛けられベルが逃げた方向を指差しながら振り向くすると……
「せ、セイバー!?」
アーチャーにはアイズ・ヴァレンシュタインがセイバーと重なって見えなのか、思わず声を上げてしまう。
「え……セイバーさん……？」
「いや、すまない。　人違いだったようだ。」
アーチャーはそう告げると去っていった。

８話～情報～

８話～情報～

タタタタ、と人の形をした赤黒い生物が街中を駆け巡りギルド本部へと向かっていく。

「エイナさぁあああああああああああん!!!!!!」

ギルドに乗り込んだこの赤い生物は音を発しある人物の名前を出す。

「ん？て、きゃあぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

声を掛けられた本人は仕事を一旦中止し、声の方向へ振り返る、が全身赤黒いのに気付き悲鳴をあげる。

「アイズ・ヴァレンシュタインさんの情報を教えて下さい!!」

最初は何者かわからなかったエイナだが、声を落ち着いて聞くとベルだと言うことが分かり冷静になる。

「べ、ベル君！　まずはシャワーを浴びてきなさい!!」

エイナは怒りながらベルをシャワールームへと押しやる。

シャワールームからベルが出てきて応接室へと向かう。

「それでアイズ・ヴァレンシュタイン氏の情報だっけ？」

「は、はい！　そうです！」

「うーん……ギルドとしては冒険者の情報を漏らすもはご法度なんだけどな……公然としてるのだけだよ？」

エイナはそう言うと説明を始めた。

本名　アイズ・ヴァレンシュタイン

【ロキファミリア】でも中枢を担っているＬｖ．５の女剣士

２つ名は【剣姫(けんき)】

またＬｖ．５相当のモンスターを１人でせん滅させたことからもう一つの渾名(あだな)は【戦姫】

その他にもその美しい容姿から話題は尽きず、アタックを掛けた男性はもれなく粉砕らしい。

また神々の間でも人気があり、「アイズたんマジ無双」とまで称されている。
「とまぁ、まだまだあるけど大まかにこんな感じかなぁ」
「えっと……そうじゃなくて出来れば彼女の趣味とか好きな食べ物とかを教えて頂けると……」
「ふ～ん……もしかしてベル君、ヴァレンタイン氏に惚れちゃった？」
「……は、はい」
「そっか～、まぁ同性の私でも溜息が出ちゃうものね」
エイナは紅茶を1口飲む、確かにアイズは美人だがエイナ自身も相当の美人だ。
「て、恋愛相談は受け付けてないよ！」
「そ、そこをなんとか！」
「ほら帰った帰った！」
悲しい背中をエイナに見せて去ろうとするベル。
「あのねベル君、きっとベル君が強くなったらヴァレンタイン氏も振り向いてくれるんじゃないかな？」
見兼ねて溜息をしながらエイナはベルに声を掛ける。
それを聞いたベルは満開の笑顔で
「エイナ大好きぃーーー！」
と大声で叫んで帰ったのであった。
ベルが去った後、エイナが耳まで真っ赤に染まってたのはまた別の話。

◇

時は遡る。
ベルがアーチャーをそっちのけでダンジョンから出てきた辺りまで戻る。
「くそ、マスターはどこへ行った！」
ダンジョンを走り回りベルを探すアーチャー、なかなか見つからず襲いかかるモンスターをあしらいつつただ駆け回る。

走り回りっているなか、他の冒険者とすれ違う。
「すまない、ここら辺で赤黒い生物を見なかったか？」
一縷の希望に掛けて聞いてみることにしたアーチャー。
「ん？　誰だあんた？　まぁ、答えてやるさ。　それなら上の階層に上がっていったぞ」
「そうかすまない、礼を言おう」
礼を述べた後凄まじいスピードで上の階層へと登っていく、その姿はまるで赤い彗星のようだった。
ダンジョンから出ると周りを見渡す、がベルは見当たらない。
先程の様に魔力を探知するが見当たらず周りに耳をすます。
そうすると赤黒い生物がダンジョンから出てきた等とかなりの噂になっていた。
もしやと思い、ギルドへと駆け込むアーチャー、ギルドの入口を入りエイナを見つけ話しかけようとする。
「……」
だがアーチャーは話し掛けられなかった、なぜかと言うとエイナは顔を真っ赤に染め上げ下をうつむいているのだ。
「はぁ、エイナ・チュール、君は何をしているのかね？」
溜息をつきながら渋々エイナに話し掛ける。
「え!?　ア、アーチャーひゃん!!?」
突然声を掛けられたのと今までの自分を見られて驚きエイナは舌を噛んでしまっている。
「君はベルを見なかったか？」
「え、ええとベル君ならさっき私のところに来てましたよ」
「……体は汚れていたか？」

「そ、そうなんですよ！　ベル君、ミノタウロスの血を浴びたままギルドにきて大変だったんですよ!!」
「そうか、それは身内が済まない事をした」
ベルの失態に頭を深々と下げるアーチャー。
「い、いいえ！　別に大したことありませんよ！」

そう言うとアーチャーに頭を上げるように催促する。
「ところでベルはどこに」
「べ、ベル君なら走って帰っていきましたよ」
「そうかすまないな、いつか礼しよう」
そう言うとアーチャーはまたまたとても迅速に走っていった。
それをポカーンと見つめるエイナであった。

9話～情憬一途～

9話～情憬一途～

ベルを追ってホームへと戻るアーチャー。　数日とはいえもはや見慣れた教会の扉を開ける。

「ベルは帰ってきているか!?」

「あ、アーチャー君。　お帰り、今日はすごい成果があるんだぜ？」

「それはいい、それよりベルは!?」

「もう、そんな事言うとじゃが丸くんあげないぜ。　ベル君なら地下にいるよ」

「そうか、了解だ」

ヘスティアの返事を聞いたら颯爽と地下へと駆けていくアーチャー、「もうなんなんだよー」と自分の話を聞いてもらえず不機嫌になるヘスティアであった。

「マスター！」

「わ、ビックリした。　アーチャーかぁ」

「ビックリしたではない！　突然いなくなったりなどするな！」

アーチャーは怒鳴り説教を始める。

確かにアーチャーが怒るのは当たり前だ。　守るべき対象が勝手にいなくなってしまっては守る事も出来ない。

「……わかったなら以後気を付けるように」

「すいません……」

アーチャーに説教されてシュンとなるベル。　だが悪いのはベルなのだからしっかりと受け止めている。

「なにやら騒がしいね」

「あ、神様」

騒ぎを聞きつけたのかヘスティアが地下へと降りてくる。

「なに、大したことはないさ」

「そうかい、ならいいんだけど。それとベル君。　いっかい席を外してくれないかい？　僕は少しアーチャー君と話したいことがあるんだ」

「え？　は、はいわかりました」

ヘスティアの突然の発言に疑問を覚えながらベルは階段を上がっていった。

「それで私に用とは？」

「……実はベル君にスキルが発現したんだ」

「ほう、それはベルは知っているのか？」

「いや知らないよ」

「なら何故教えない？　それ相応の理由があるのだろう？」

「ベル君のスキルは特別過ぎるんだ。　スキルの名前は憧憬一途（リアリスフレーゼ）。能力は、早熟する。懸想（おもい）が続く限り効果は持続し、懸想（おもい）の丈により効果向上するというのがベル君が持ってるスキルだよ。　これは一般的にレアスキルに該当する。　少なくとも僕はこんなものは見たことがない」

「つまり日々娯楽に飢えている神々がベルの事を知ってしまうと引っ張りだこになるということか？」

「うん、それもそうなんだけれどこのスキルの能力的にもベル君には知らせない方がいいと思うんだ。　アーチャー君には一応言っておいた方がいいと思ったから言ったんだ。　ベル君には内緒にしておいてくれよ？」

「了解した。　他言無用にしておこう」

「よし！　それなら今日はバイト先で沢山じゃが丸くんを貰ったから今日はじゃが丸パーティーだ！」

「ほう、それはいいな。　なら私はそれに見合う物を軽く作るとしよう」

　アーチャーはそう言うと階段を上がっていく。　それに続きヘスティアも上がっていく。

「神様、何を話してたんですか？」

「ん？　いや、大したことじゃないさ。　それよりか早くじゃが丸くんが食べたいな！」

「ええ！　たのしみです！」

キッチンへと向かうアーチャーの背中を目で追うヘスティア。

（ベル君は必ず強くなる。　それはアーチャー君、君にも掛かってるんだ）

ヘスティアにはこれからのベル達の成長が楽しみなのだ。

１０話～出会い～

１０話～出会い～

今は朝、ちょうど5時といったところだろうか。　ふとベルが目を覚ます。
農民育ちのベルにとっては朝早く起きるのはもう慣れている。だがそのベルよりもアーチャーの方が朝食を作るために起きる時間が早く、実は寝ていないんじゃないかとベルは疑ってしまう。
ホームである教会の地下に置かれたボロボロのソファーからいつものように起き上がろうとすると、　なにやら柔らかい感触がベルの肘に伝わってくる。
１人で寝るのがやっとであるソファーに無理矢理ベルを抱き枕にする感じでヘスティアが添い寝しているのだ。
神様！　一体なにをしているんですか！　とベルは叫びそうになるがまだヘスティアが気持ち良さそうに寝ている為、　無闇に起こさないように抜け出そうとする。
「……なかなか抜け出せない」
小声で呟き、抜け出そうとするがその間にもヘスティアの豊満な胸がむにむにとベルの理性を削っていく。
あまりの必死さに階段から降りてくる音がしているのに気付けてない。
「……んっ……あっ……」
ヘスティアが軽く喘ぐ。
ベルは顔を真っ赤に染めて必死に抜け出そうとするがヘスティアのホールドは強くまだまだ抜け出せない。
「……はぁ、何をしているのかね、ベル」
呆れ声と共にアーチャーがやってきた。　朝食ができた旨を伝えに来たのだ。
「いや、これはその……だぁあああ!!」

ベルは見られたくなかった光景をアーチャーに見られてしまい、恥ずかしさのあまり必要なものだけ持って、走って逃げていってしまった。
「な、マスター！　待つんだ!!」
アーチャーの呼び止める声も無視して。

◇

走る、走るただひたすらバベルの塔を目指して走る。　その姿はまるで狩人から逃げている白兎のようだ。
「うわあぁぁあああ!!」
しかも叫びながら走っているため朝早くから近所迷惑である。
「はぁ、はぁはぁ……」
流石に疲れたのか走るのをやめてその場で立ち止まる。　息は切れているもののそこは冒険者、『神の恩恵（ファルナ）』によって研ぎ澄まされた五感によってベルは視線を感じ取ることができた。
「あの……」
急に声を掛けられ不意に構えをとるベル。　だが振り返った先にいたのは給仕服を着た少女だった。
「きゃ!?」
「あ、す、すいません！」
突然ベルが臨戦態勢に入ったのだから驚いている。　そして相手が一般市民だとわかるとすぐに謝るベル。　まさにその謝るスピードは一流だ。
「だ、大丈夫です。　ちょっと驚いただけですから」
「そ、それで僕に何か用ですか？」
「あ……はい。　これ落としましたよ」
そう言うと少女は魔石の欠片が包まれた右手を差し出してきた。
「す、すいません！　ありがとうございます！」
あれ、昨日全部換金したよな？と不思議に思うベルだがそこはス

ルーした。
「いえ、お気になさらないでください」
少女はそう言いつつ微笑みを浮かべた。
「こんな朝早くからダンジョンに行かれるんですか？」
「はい、僕はまだまだ弱いんでもっと強くなりたいんです！　それに目標の人もいますし」
とベルも微笑みで返すが、ぎゅるるーと腹の虫が鳴いてしまい先程と同様、顔を真っ赤に染める。　直ぐに朝食を食べずに飛び出てきた事を思い出し、今すぐ逃げたい気持ちを押さえ込んで必死に弁解する。
「ご、ごごごめんなさい！　きょ、今日は朝ごはんを食べそびれちゃったから」
「ふふふ、そうなんですか。　ちょっと待ってて下さいね」
彼女は店の中に入っていく。
店の名前は『豊饒の女主人』と看板に書かれてる。
少しすると少女が戻ってきてその右手には小さめのバスケットが握られている。
「これよかったら食べてください。まだお店がやっていなくて、賄いじゃあないんですけど…」
中には簡単なサンドウィッチなどが入っている。
「そんな悪いですよ！　これって貴女の朝ごはんじゃ」
そう言って返そうとしている時も腹の虫は空気を読まずになり続ける。
「このまま見過ごしてしまうと、私の良心が痛んでしまいそうなんです。だから冒険者さん、どうか受け取ってくれませんか？」
「え、で、でも……」
「それにこれは利害の一致にもなるんですよ？　貴方は私の朝食を食べる代わりに夜に私達のお店の『豊饒の女主人』でお食事をしてください！　そうすれば私のお給金アップも間違いなしです!!」
彼女はいたずらっぽく笑う。
「わ、わかりました。　それでお願いします」

「ふふ、私はシル・フローヴァです。　冒険者さん、あなたは？」
「僕はベル・クラネルです。お礼になるかはわかりませんが、今日の夜に伺わせてもらいます」
「はい。お待ちしてますね」
　そこでシルとは別れ、バベルの塔へと向かう。　アーチャーを置いてきてしまったのだからダンジョンにはまだ潜らず、シルに貰った朝食を食べて待っている。
　この朝早い時間帯からも冒険者の姿はポツポツと見え、少し経つといつもの見慣れた顔が近付いてきた。
「ベル、　あれほど勝手に1人で行くなと言っただろう！」
「ご、ごめんねアーチャー。　その神様は？」
「ん？　あぁ、朝食を作り置きにして置き手紙も書いてきたから大丈夫だろう」
　聞きたいのはそこじゃないんだけどなぁ、と思うが取り敢えずさっきあったことを伝える。
「ふむ、つまり今夜は外食にするということだな？」
「う、うん。　そうなるよ」
「そうか、なら出来るだけ多く稼ぐとしよう」
「うん！」
　こうして1日が始まる。

11話～怒り～

11話～怒り～

今日は外食すると言うことでいつもより稼いでおきたかったらしくアーチャーがそこら辺のモンスターを一掃したお陰でかなりのお金が集まった。　前に手に入れた金は何故かいざという時以外は使わないようにしているらい。

夕方となりダンジョンから出てきたベルとアーチャーは朝約束した通りに『豊饒の女主人』へと行くために一度ホームへと戻った。

ヘスティアに事情を話した後一緒に来るかと聞いたら何故か拗ねた顔でバイトの打ち上げがあると言われ断られてしまった。

「ねぇ、アーチャー。　神様なんであんなに拗ねてたんだろう」

「……まあ、気にしなくていいだろう。　彼女もバイトの打ち上げがあると言っているんだ」

「そ、そうかな」

アーチャーは何故ヘスティアが拗ねているのかはある程度予想がつくが、一々それをベルに伝える気はなくまた、それはベル自身が気付くべきことだからスルーしていた。

ヘスティアがホームを出てからもベルは落ち着きがなくこのままではしょうがないからで少し早めにホームを出た。

通る道は朝とは違って冒険者や一般市民で賑わっており、所々から楽しそうな声が聞こえてくる。

少し歩くと『豊饒の女主人』が見えてきて、また朝とは違って色々な種族で賑わっていた。

「あ、ベルさん！　来てくれたんですね！」

店に入った瞬間にシルが迎えてくれた。

「はい！　約束ですので、それと朝はありがとうございます。　美味しかったです」

「ふふ、　どういたしまして。　……ところで隣の方は？」

「あぁ、この人は僕と同じヘスティアファミリアに所属していて」

「アーチャーだ。　宜しく頼む」
　これで更にお給金アップですね、とシルはいたずらに微笑むと2人をカウンター席へと案内した。
　カウンター席に座ると少し待つようシルに言われ待っていると声をかけられた。
「アンタがシルのお客さんかい？　冒険者のわりには可愛い顔してるね！　そっちのアンタは東洋人かい？」
　はっはっはと豪快に笑いながらベル達に話しかけてくるのはここの女将であるミア・グランドだ。
「あぁ、私は東洋出身でね。　それで女将、メニューはどこかね？」
　アーチャーが質問するとミアはメニューを渡した。　アーチャーはメニューに目を通し自分が知っている料理があるか探す。　世界は違えど料理は殆ど同じようだった。
「何でもアタシ達に悲鳴を上げさせるほど大食漢なんだそうじゃないか！　じゃんじゃん料理を出すから、じゃんじゃん金を使ってってくれよ！」
「え？」
　そんな事一言も言ってないぞと思ったベル。　店の奥から出てきたシルに目を向けると。
「えへへ」
「ええへ、じゃねー！」
　心優しいと思ったらとんだ魔女だった。この後も散々からかわれて、最後には冗談ですと笑い、ちょっと奮発してくれるだけでいいと言うあたり、本当にちゃっかりしている人だとベルは思う。
「ベル、女性に向かってその言い方は失礼だろう。　それに今日は多めに稼いで来たのだから良いだろう。　少し奮発すればいいと彼女も言っている」
「そ、そうかな……」
「あぁ、それでは女将。　この魚の煮付けと酒を頼む」
「あいよ！　そこの子兎はどうするんだい？」
「え、えっとパスタでお願いします」

魚の煮付けと酒で５００ヴァリスで、パスタ一つで３００ヴァリスだ。
因みにこのオラリオでは1日５０ヴァリスあれば3食は食べていける。　つまり何が言いたいのかというと、めちゃくちゃ高いのだ。
だからベルは安めのパスタを頼んだのだ。まあ、それでも少し高めなのだが。
少しの間ベルとアーチャーが歓談しているとテーブルに物凄い量のパスタも魚の煮付け、酒の入ったジョッキが並べられた。
「さぁ、じゃんじゃん食っていってくれよ！」
「ふむ、見た目も匂いもいい。　では頂こう」
煮魚を一口分取り口へ運ぶ。
「……！　これは美味い！　なかなかいい腕をしている」
「ほお、なかなか分かってるじゃないか」
「私は料理には口が五月蝿くてね」
ここからアーチャーとミアの料理話が始まる。　ベルは話には全く付いていけず、一人で食べ切れるかもわからないパスタを食べ始める。　やはりアーチャーがいい評価をするだけあって美味い、案外食べ切れるかもと思いどんどん食べていくベル。
「おお！　いい食べっぷりじゃないか！　もっと食いな!!」
アーチャーとの論議の途中ベルに視線が向いたのか減りかけていたパスタがまた増える。　またひたすら食べているとシルに声をかけられた。
「楽しんでいますか？」
「…圧倒されてます」
そんな会話をしていると団体客が店内へと入ってくる。　すると他の客達がざわつき始める。　ふと気になりベルが団体客へと目を向けるとそこには【ロキ・ファミリア】がいた。
【ロキ・ファミリア】がいるということはベルの片想いの相手もアイズ・ヴァレンシュタインもいるということだ。　ベルは今すぐ帰りたい気持ちになったが楽しそうにミアと会話しているアーチャーを見ると悪い気がしてきた。

しょうがなく我慢していると会話が聞こえてきてしまった。
「そうだ、アイズ。お前のあの話を聞かせてやれよ！」
「……あの話？」
「あれだって、帰る途中で何匹か逃したミノタウロス！最後の一匹、お前が5階層で始末しただろう!?そんで、ほれ、あん時いたトマト野郎の！」
「ミノタウロスって、17階層で襲いかかってきて返り討ちにしたら、すぐ集団で逃げ出したやつ？」
「それそれ！奇跡みてぇにどんどん上層に上がっていきやがってよっ、俺達が泡食って追いかけていったやつ！こっちは帰りの途中で疲れていたってのによ～」
あまりにも大きな声で青年が喋っているのでアーチャーもベルが挙動不審になっていることに気付き戻ってきた。
「そんでよ、いたんだよ、いかにも駆け出しっていうようなひょろくせえガキが！」
「ベル、あのような阿呆は放っておけ。　騒ぎたいだけ騒がせればいい。　関わるだけ無駄だ」
だがそれでもベルには無視ができない。
「抱腹もんだったぜ、兎みたいに壁際に追い込まれちまってよぉ！しかも、アイズがミノを細切れにしたからそいつ全身にくっせー牛の血浴びて…真っ赤なトマトになっちまったんだよ！」
そう言って、その青年は腹をおさえ爆笑していた。他のメンバーは失笑し、別のテーブルで話を聞いていた部外者は釣られて出る笑みを必死に噛み殺す。

「トマト野郎、叫びながらどっかいっちまってっ…ぶくくっ！うちのお姫様、助けた相手に逃げられてやんのおっ！」
「……くっ」
「アハハハハッ！そりゃ傑作やぁー！冒険者怖がらせてまうアイズたんマジ萌えー!!」
「ふ、ふふっ…ご、ごめんなさい、アイズっ、流石に我慢できない…！」

どっと笑いに包まれる【ロキ・ファミリア】、それにつられて周りの客も笑い出す。
　我の隣ではシルがベルのことを心配そうに声をかけていたが、集団の話は進んでいく。
「いやぁ、本当に情けねぇ奴だったよ、勘弁してほしいぜ」
「いい加減そのうるさい口を閉じろ、ベート。ミノタウロスを逃がしたのは我々の不手際だ。巻き込んでしまったその少年に謝罪することはあれ、酒の肴にする権利などない。恥を知れ」
「おーおー、流石エルフ様、誇り高いこって。でもよ、そんな救えねえヤツを擁護してなんになるってだ？それはてめぇの失敗をてめぇで誤魔化すための、ただの自己満足だろ？」
「これ、やめえ。ベートもリヴェリアも。酒が不味くなるわ」
「アイズはどう思うよ？自分の目の前で震え上がるだけの情けねぇ野郎を。」
「……あの状況じゃあ、しょうがなかったと思います」
「なんだよ、いい子ちゃんぶっちまって。…じゃあ質問を変えるぜ？あのガキと俺、ツガイにするならどっちがいい？」
「……私は、そんなことを言うベートさんとだけは、ごめんです」
「無様だな」
「黙れババアッ。…じゃあ何か、お前はあのガキに好きだの愛してるだの目の前で抜かされたら、受け入れるってのか？」
「……っ」
「そんなはずねえよなぁ。自分より弱くて軟弱な雑魚野郎に、他ならいお前がそれを認めねえ」
「雑魚じゃあ、アイズ・ヴァレンシュタインには釣り合わねえ」
　その言葉を青年が発した瞬間にアーチャーとベルが同時に動き出す。　ベルは椅子を蹴り飛ばし、そのまま外へと駆け出す。アーチャーはいい加減青年の口を黙らそうと周りの目も気にせずに青年の後ろへと周りの干将・莫耶を投影（トレース）し、峰を首に当てる。
「いい加減黙ったらどうだ。　美味い飯も不味くなるだろう」
　普段の冷静なアーチャーからは考えられない行為だが、答えを得た

後自分のいた世界とは全く別の世界に召喚され、自分と同じ夢を持つ少年と出会い、共に生活をしていくことで感化されその少年を馬鹿にするのは許せなくなった。　そして何より弱きものを貶すのは嘗て弱かった頃の自分自身をバカにされているような気がして許すことが出来なかった。

「……！　なんだてめぇ!!」

　漸く自分の置かれた状況に気が付いたのか青年が吠える。　周りも気が付いたようでギャーギャーと騒ぎ立てる。　その中で一人、アイズ・ヴァレンシュタインだけは周りと違う意味で驚いていた。　この人はミノタウロスに襲われていたあの少年の知り合いだ、と。

　そこでアイズはふと思う。

　ならさっき外へと飛び出した少年はあの白髪の少年ではないのだろうかと。　そう確信した瞬間にアイズも外へと飛び出すが、既にそこにベルの姿なく、仕方なく中へと戻った。

「お前！　ウチらのファミリアが【ロキ・ファミリア】と知ってて喧嘩売っとんのか!?　さっさとベートを離せや!!」

　赤毛の男物の服を着た少女がエセ関西弁で威嚇する。

「ふ、笑わせてくれるな。　その天下の【ロキ・ファミリア】がまだダンジョンに潜りたての初心者を馬鹿にして酒の肴にするとは程度が知れるな」

　負けずとアーチャーも反論する。

　その様子に周りの客も【ロキ・ファミリア】の団員もポカーンと見ている。

「な、なんやと!!」

「そういう君は神ロキと見受ける。　自分のファミリアの団員がその様な恥じた行動をしているのにそれを止めるのではなく一緒に混じって馬鹿にする。　全く、神としての品性も疑われるな」

「ふざけんなや！」

　その言葉に完璧にキレるロキだがキレていたのはロキだけではなかった。

「……！　いい加減離せっててんだよ!!」

ベートは、Ｌｖ．５の力と今まで培ってきた技術でアーチャーを振り払う。
「はっ！　どこの誰だか知らねーがその喧嘩買ってやるぜ」
「その前に表へでろ、店に迷惑が掛かる。　それに女将もお怒りなようだからな」
　アーチャーがそういうと皆が同時にミアへと目線を向ける。　凄く怒っていた。　その場にいた誰もが凍りついきそして思った。
この女将（ミア・グランド）だけは敵にしてはいけないと。
「ケッ！　いいぜ、痛い目あわしてやる」
「ふ、弱い狗ほどよく吠えると言うが本当の事だったのだな。　実力の違いを見せてやる」
　完全に頭に血が上っているアーチャーは冷静な判断ができないのか煽りを入れる。　外へ出ようとすると露出度が高めの服を着た褐色肌のアマゾネスの少女等に声をかけられる。
「アンタがどの位強いかは知らないけどベートはあれでＬｖ．５の第一級冒険者なのよ？」
「そうだよ！　アイツもキレてるからもしかしたら殺されちゃうかもしれないよ」
「ふ、あの程度の狗に負けるほど私は落ちぶれてはいない。　逆に聞こう、別にあれを倒してしまっても構わんのだろう？」
　アーチャーの自信たっぷりの態度に呆れたアマゾネスの少女。
「はぁ、もう知らないわよ。　好きにしなさい」
『豊饒の女主人』の前には人だかりが出来ていて、その円の中にはＬｖ．５の第一級冒険者であり、狼人（ウェアウルフ）であるベート・ローガとサーヴァントアーチャーこと英霊エミヤシロウが対峙する。
「てめぇ、武器はどうした？」
　今にも飛び掛りそうな目をしながらアーチャーに問う。
「ふ、貴様如き相手するのに素手で十分だ。　ハンディキャップだと思ってくれていい」
　店を出る前に誰にも見られないように干将・莫耶を消しておいたのだ。　流石に誰かに見られると不味いと思っての行動である。

「糞が！　調子に乗るんじゃねぇええ!!」
ベートがアーチャーに襲い掛かる。
こうして戦いが始まるのであった。

１２話～驚きの出会い～

１２話～驚きの出会い～

満月が闇夜に輝くここ迷宮都市オラリオ。　その街にある酒場、『豊饒の女主人』の前には人だかりが出来ており、そこでは戦闘とは名ばかりの喧嘩が行われていた。

「ベート！　そんななよなよ強い調子乗っとるやつなんか、いてこましたれ！」

情けなくアーチャーに論破された【ロキ・ファミリア】の主神であるロキは、自分の眷属（子供）であるベートがアーチャーをボコボコにすると確信して声援を送る。

その他にも「やっちゃえー」や「1分は耐えろよー」　などと第一級冒険者であるベートが勝利すると誰もが思っていた。　誰もアーチャーの実力を知らずに。　だがそれも仕方のないことだろう、Ｌｖ．が高ければある程度名が知られているが、アーチャーは見かけたことがない。　そう思っているからだ。

「何時までも自分への声援を聞いていたいだろうが早く掛かってきたらどうだ？」

「……！　てめぇに言われなくてもやってやらぁ!!」

ただ真っ直ぐに直線にＬｖ．５と言う初心冒険者（ルーキー）には理不尽な力をもって突っ走るベート。　だがベートが対峙するは魔力供給が少ないながらもその身は英霊（つわもの）達と戦ってきた正義（えい）の味方（れい）なのだ。　経験や修羅場を乗り越えた来た数は月とスッポンだ。

「これで終いだ!!」

ベートは狼人（ウェアウルフ）であるベートに元々備わっていたその爪で一気に方を付けようとするが、当然の様にアーチャーはそれを躱す。

ベートはマグレだろうと自分に言い聞かせすぐさま２発目を入れるがまた躱される。

「君の本気はこんなものかね？」

「へ、いいぜ。　本気を出してやるよ！」

アーチャーの軽い挑発に乗り先程とは比べ物にならないスピードでアーチャーに攻撃を繰り返す。　だがそれを嘲笑うかの様に躱す。
いくらやっても当たらない。もう攻防を初めて２０分は経とうとしている。　その光景に【ロキ・ファミリア】は勿論、周りの野次馬の息を飲んでいた。
「いい加減……当たりやがれ!!」
２０分以上攻撃を続けていたベートは遠征帰りで酔っていた事もあり体力がもう無い。　なけなしの一撃も当然のように躱され、そこの隙を狙いアーチャーは一撃を入れようとするが
「何をしているのですか!?　アーチャー!!」
ある声に制された。
声の方向へ振り向くと金髪の翠の瞳をした美少女が立っていた。

……

はぁ、まさかあそこでジャンケンに負けるとは思ってもいませんでしたよ。　お陰で換金をしに行くなんてひじょーうに億劫な目に合うなんて。
けどマスター（アイズ）の申し訳なさそうな顔を見るとどうもダメですね。
ほんとアイズは可愛いんですよ。　あ、けど私にそっちの気はありませんので悪しからず。
まあ、そんな事はどうでもいいのでさっさといつも通りの『豊饒の女主人』に行きましょう。　もうお腹がペコペコです。　あそこのお食事は美味しいので大好きです。　店員もみんな優しくて面白いしとても良いです。
ん？　店の前で人だかりが出来てますね。　ん？　耳を澄ませば中央からベートが戦っている声が聞こえますね。
はぁ、また喧嘩ですか。　後で説教してやりましょうか。
「すいません、通して下さい」

人混みの中を通ろうとすると「な、『騎士王(アーサー)だと…』とか野次が聞こえますが無視です。　因みに『騎士王(アーサー)』とは神々が私に付けた二つ名です。
「あ、アルたん。　あいつ何者か知っとるか!?」
「どうしたんですかロキ、そんなに慌てて?」
「あれを見てみぃ!　誰か知らんやつがベートを圧倒してるんやっ!!」
「まさか、そんな訳がないでしょう。　ベートはＬｖ．５ですよ?　仮にベートを圧倒してたとしたら『猛者(おうじゃ)』くらいでしょう。」
はぁ、お酒に酔ったんでしょうかね。だらしないですよ全く。
取り敢えず見てくるとしましょう。
「すいません、通して下さい」
え?　ア、アーチャー!?
なんで彼が此処に??　召喚されてかれかなり時が立ちますが未だにサーヴァントと出会うことは無かったので居ないのだと思っていましたが、まさかまたシロウと会うことになるなんて……
「いい加減……当たりやがれ!!」
また躱された!
ベートが危ない!!
「何をしているのですか!?　アーチャー!!」

……

「な、セ、セイバー?」
「アーチャー、何故あなたが此処に?　いや、何故あなたもこの世界に?」
ベートを支えながらセイバーは言う。
「いや、その話はこの場でしては墓穴を掘るようなものだ。　セイバー、いやアルトリア、君は【ロキ・ファミリア】に所属をしているのかね?」
「ええ、そうです。　ところで何故あなたが!?」

「その話は少し待ってくれないか？　それで君は主神（ロキ）に事情を話したのか？」
「ええ、話しましたよ。　それで私の質問にも答えてください!!」
　セイバーが言及するもアーチャーは「そうか」と返事をし、ロキの方へと向かっていく。
　アーチャーに恐れたのか野次馬共は道を開ける。　ロキに近づくとロキを守るかのように眷属（ファミリア）の団員が囲っている。
「な、なんや？　」
「この度は君の眷属に手を出した事を詫びよう。　どうやら私も酒に酔っていたようだ。　それで神ロキ、君に折り入って話があるのだが時間を頂いてもいいか？　セイバーとセイバーのマスターとでだ。」
「わかったわ、そこの裏路地でええか？」
「ああ、礼を言う」
　マスターと言う言葉で状況が読み込めたのか【ロキ・ファミリア】の団員達には店に戻すように言いベートは罰
　吊るしておく様に命令した。セイバーとアイズを呼んできて裏路地へと向かう。
「まずはさっきんことは謝る。　後であの子にはベートから謝らせとく」
「あぁ、マスターには謝罪しておいてもらいたい」

「そんで、お前はマスターか？　それともサーヴァントか？　と言うよりかアルたんと知り合いって事はサーヴァントか」
「ああ、そうだ。　私はサーヴァントだ。　クラスはアーチャー。だがなアルトリアのマスターをしていたこともある」
「なんつーか凄い関係やなー」
　アーチャーとセイバーの関係を聞いた途端ニヤニヤしだすロキ。
　そこでアイズが疑問を投げかける。
「えっと、あなたのマスターってもしかして……？」
「ああ、そうだったな。　アイズ・ヴァレンシュタイン。　マスターを救ってくれてありがとう。　マスターはあまりの恥ずかしさに逃げ

てしまったようで礼を言えてなかったからな。　いつかこの恩は返そう」
「ミノタウロスを逃がしたのは、私達ですし……」
　それでも礼を言うアーチャーに今度はロキが疑問を投げかける。
「そんで、お前達は何処のファミリアに所属してるん？」
「君なら知ってると思うが【ヘスティア・ファミリア】だ。」
　予想していた答えよりも斜め上に行き過ぎていて思わず叫んでしまう。
「んな、あのドチビんとこだと!!」
　ああ、そうだが。　と頷くアーチャーにロキは閃いたようで何やら物凄い勢いで告げた。
「ならマスター共々ウチのファミリアにこんか!?」
「ロキ！　他のサーヴァントが見つかった以上、聖杯戦争が始まる可能性がある中で!!」
　突然の提案に声を荒らげるセイバー。
　なんや、残念やな。　と残念がるロキを無視してアーチャーはセイバーに問い掛ける。
「セイバー。　君は何時から召喚された？」
「それは十数年前ですが……」
　確信したようにアーチャーはセイバー、アイズ、ロキの３人に告げる。
「君も聖杯からの魔力供給はされていないことに気付いているだろう？　それなら恐らくは聖杯は機能してない。　つまり聖杯戦争は起こらない」
　あくまで仮定だ、と後付けしたあとセイバーに目をくれるとあまりの驚きに言葉も出ないようだった。
「それじゃ、ウチのファミリアに入ってくれるってことか!?」
　聖杯戦争が起こらないなら別にサーヴァントが一緒のファミリアにいても問題が無いと判断したロキは先程と同様に声を荒らげた。
「いや、私のマスターは恐らく【ヘスティア・ファミリア】を見捨てはしないだろう。　神ロキ、君の知っている通り【ヘスティア・ファミ

リア】には私達以外に団員がいない。　マスターは優しいからな、ファミリアを潰すような事はしないだろう。　だが一応聞いてみるだけ聞いてみよう。」
「アーチャー、そういえばあなたのマスターはどうしたのです？」
　完璧に忘れていた。　アーチャーにも酒が回っていたため完璧に忘れていた。　ベルがどこに言ったのかを直ぐに考えるアーチャー。
　だがなかなか思い浮かばない。
「あの子なら、ダンジョンの方へ、行ったよ」
　酒場から飛び出して行った人物がベルだと分かり、その方角にはダンジョンがある事からダンジョンに行ったのだと推測された。
「すまないがこの話は又後日でいいか？」
「ああ、その方がええみたいやしな」
　ロキから了承を得るとダンジョンへと物凄いスピードで走り去っていった。

13話～覚醒前夜～

13話～覚醒前夜～

「はぁっ、はっ、はっ！」

ベルは荒い呼吸をしながら5層から出現する長い舌で冒険者を攻撃する『フロッグシューター』にトドメを刺す。

今ベルがいるのは先日ミノタウロスに殺されかけた5層より1層下の6層。

しっかりと先日の事を反省していたベルだが酒場でのあのベートの言葉で冷静ではいられない程に自分を責め立てた。

強くなりたい、そしてあの憧憬（アイズ・ヴァレンシュタイン）に追い付きたい。　その一心でひたすらモンスターを倒す。　ただ、強敵を求めてひたすら倒しては進み下の階層へと下がり続ける。

防具は既にボロボロ、武器である短刀も刃こぼれが酷い。　しかも冒険者になってまださほど時が経っていないベルにとっては自殺願望としか思えない。

「はぁっ、はぁはぁ……」

辺りにいたモンスターは一通り倒したので周りに警戒しつつ腰を下ろす。　現在ベルがいる此処は『ルーム』と呼ばれており部屋状の広い空間となっている。

駆け出しの冒険者が5、6層のモンスターと互角以上に戦えている。　その事実だけでも十二分に凄いというのにベルはまだ満足出来ない。

（悔しい……!!　こんな事ではアイズさんにそしてアーチャーにも追い付けない!!!）

アイズに追い付きたいとは言っているもののやはり英雄になるという夢は諦める訳ではなくすぐ近くにいて最も遠くに立っているアーチャーが1番の目標だった。

連続の戦闘と6層までの道のりでもう疲れきっているベルは地面

に腰を下ろす。
ビキリ
辺りの静寂を破るように嫌な音が『ルーム』に響き渡る。
ビキリ、ビキリ
更に続く様にベルを殺そうとするダンジョンがモンスターを生み出す。
出てくるのは2体の身の丈１６０Ｃ程の全身は黒一色に染まった人型モンスター　。　名は『ウォーシャドウ』
異様に長い腕の先には三本の指が備わっており、その指はナイフのような形状で攻撃をしてくる。純粋な戦闘力は６階層の中のモンスター随一　だ。
２体の『ウォーシャドウ』はベルの逃げ道を無くすように挟み撃ちの形で攻撃をしてくる。　攻撃を躱す様に立ち短刀で応戦するも殆ど体力の残っていないベルではどうにもならない。
「こんな……こんなところで挫けてたまるか!!」
心からの叫びだった。　瞬間背中のステイタスが熱くなり、何かに恐れたのか『ウォーシャドウ』が身を引く。
「うおぉぉぉぉぉぉ!!」
勿論ベルがその瞬間を見逃す筈がなく『ウォーシャドウ』に襲いかかる。
怒涛のラッシュに１匹、２匹と消えていく。　辛うじて最後の１匹は反撃したものの攻撃を躱されすぐさま倒される。
ベルはまた腰を下ろす。　どうやらドロップアイテムである『ウォーシャドウの爪』が落ちていたようだ。　ふと手にしたその時
ビキリ
また嫌な音がなり『フロッグシューター』や『ウォーシャドウ』が出てくる。
再び立ち上がり先ほどドロップした『ウォーシャドウの爪』を武器代わりにしてまた立ち向かう。
既に限界を超えた戦闘をしたベルではもう勝てるはずも無い、勝機の薄い戦闘などやるだけ馬鹿だろう。　だが立ち向かわなければ死

んでしまう。
（まだだ……！　まだ戦える!!）
意思を固め、戦闘を開始しようとした瞬間、後ろから黒い色をした矢がモンスターを次々と射る。
ベルが振り返るとそこには西洋風の弓を構えたアーチャーがいた。
「アー、チャー……？」
「はぁ、全く君は何回言わせるんだ？　勝手にダンジョンに行かれたら困ると言っているだろう」
弓を消してお手上げとばかりに両手を上げるアーチャー。　その様子を見て安心したのかベルは地面へ倒れ込んだ。
「ベル!?」
己のマスターを助ける為に全身全霊でベルを支える。　確認したところ単に疲労で寝てしまっただけだと分かり安堵するアーチャー。
「はぁ、全く帰ったら説教だな」
そう呟くとアーチャーはベルを背負いながらダンジョンを去っていった。

◇

ここ数日毎日通っている道をいつも通りに通り角を曲がると見えてくる古びた教会、【ヘスティア・ファミリア】のホームだ。　アーチャーが修理してからはマシにはなったもののやはりまだボロボロだ。
そんなホームの中、このファミリアの主神であるヘスティアは1人困っていた。
（あ～、あんな事を言わなければ……それに帰りもなんだか遅いしなぁ）
折角ベル達眷属（子供）に夕餉を食べに行かないかと誘われたのに勢い余って断ってしまってしかも帰りが遅い。　何かあったんではないかと心配で心配でたまらないのだ。
頭を抱え転げ回っていると不意にキィと玄関が開く音がする。

ヘスティアがそっちに目を背けると赤い外套を羽織った身長が高めの白髪の青年が同じく白髪の傷だらけでボロボロの少年を背負いながら何をしているんだと言いたそうな目でヘスティアを見ている。
「アーチャー君!! 帰りが遅いじゃないか!!ってベル君のその傷は一体どうしたんだい!?」
帰りが遅いアーチャーに一喝を入れるが傷だらけのベルを見て態度を一変させる。
「あぁ、別に大したことは無い。 それより騒ぐな、ベルが起きてしまう」
すまないと謝罪をしてから小声でまたどうかしたのかと質問をするヘスティア。 だがアーチャーは答えようとはせずにベルを下ろす。
すると先程のヘスティアの声で目を覚ましたのかベルはアーチャーとヘスティアに自分の決意を告げる。
「神様、アーチャー。 僕強くなりたいです」
その一言を言って体力が尽きたのかまた眠りについた。

……

オマケ
アーチャーの楽しい回復薬(ポーション)考察

ここオラリオには迷宮と呼ばれている地下洞窟のようなものがありそこにはモンスターが出現する。 そのモンスターは倒すと魔石と呼ばれる石がドロップする。 それを集めて生計を立てているのが冒険者と呼ばれる人々だ。
勿論モンスターと戦うと怪我をしない訳ではない。 つまりその怪我を治す薬があるのだ。 それが回復薬(ポーション)だ。
その回復薬(ポーション)は冒険者の治癒力を高めて怪我を治すという代物だ。

そこで俺はふと思った。
治癒力を高める＝細胞分裂の速度を早めると言うことになる。
人の細胞分裂の数は決まっているという。つまり死期を先延ばしにしているのではないか？　まあ、確かにその場で死ぬよりかはマシだとは思うがそこは本人次第なのだろう。
だが聞くところによると『ステイタス』には老化を防ぐ副次効果があるらしい。　それはＬｖ．ｕｐし器が昇華され不老不死の神へと近づくそうだ。
結論的に言うとポーションの使用回数が少ないほど長生きができ、またＬｖ．が高い冒険者は見た目で年を判断してはいけないと言うことだな。

１４〜夢〜

１４話〜夢〜

夢を見た。

そこは吹き荒れた荒野、空には太陽など見えず、雲と大小大きさが様々な歯車が浮いている空。　そして何より異様なのが荒れ果てた大地に突き刺さるっている無数の剣。

短剣もあれば長剣もあり、直剣もあれば曲剣もある。　だがどの剣も既にボロボロだ。

荒野を彷徨い歩くと丘が見えてくる。　ふと見上げるとそこには体中に剣が刺さった白髪で褐色肌の赤い外套を纏った男が立っている。

その顔は何かをやり遂げて後悔しているような顔だった。

瞬間、　目が合うと変わる景色。

次にベルが目にしたのはまるで地獄の様な光景だった。どこへ行こうと瓦礫と炎に包まれており、周りには死体だらけだ。　その光景を恐れたベルは兎に角逃げようとひたすら走った。　ずっと走り逃げていたからなのかベルは疲れ果てて立ち止まってしまった。ふと後ろを見ると黒髪の男が必死に瓦礫の中から何かを探している。何を見つけたのか覗いてみると、そこにはボロボロの赤髪の小さな赤毛の男の子が見つかった。

この災害の中で生き残れたのは物凄く運が良かったからなのだろう。

見つけた時の男の顔が心底嬉しそうに見えたからきっとあの赤毛の男の子は彼の息子なのだろうとベルは思った。　そしてよかったと

そしてまた景色が変わり今度は純和風の縁側に先程見た男と赤毛の男の子なにやら会話をしている。　ベルは声を出さずに気配を消して近づく。

実はベルの存在は男らには感知されないようだが、無論ベルはそんなことは知らない。
「僕はね、正義の味方になりたかったんだ」
綺麗な月光が男と赤毛の男の子を照らしている中、男が話し出す。
「なんだよ、それ。〝なりたかった〟って。諦めたのかよ」
「でも、正義の味方というのは期間限定でね、子供の頃にしかなれなかった」
その言葉にベルは思わず反論をしそうになった。ベルにとって正義の味方とは。それはベル自身が目指している英雄と同じだと同じだと思っている。弱気を守る力。まぁ、ベルの場合はダンジョンで女の子を守るところから来ているのだが。
「なんだ。それならしょうがないな」
「うん。本当にしょうがない……」
ベルはまた反論したくなる。だが赤毛の少年が次に言ったセリフで何も言えなくなる。
「しょうがないから、俺が代わりになってやるよ」
「あぁ――――安心した」

その声を聞くと男は安心したかのうに言葉を発したながら倒れる。
どうやら衰弱死のようだ。その中でも赤毛の少年の金色の目は強くそして真っ直ぐに輝いていた。

リメイク後
※リメイク　プロローグ前編

どんよりとした空には歯車が浮かび、無数の剣が突き刺さる丘に赤い外套を纏った1人の男が座っていた。
「私の負けか…」
その男――エミヤシロウは過去の己、つまり第五次聖杯戦争で遠坂凛にアーチャーとして召喚され、マスターとして参加している衛宮士郎を殺す事で過去の過ちを正そうとした。
結果は失敗に終わったがしっかりと答えは得た。
「遠坂とも約束したからな…」
彼は世界の守護者として永久の時の中で何時までも世界の為に戦い続けなければならない。
だがそれでも答えを得ることができた彼は何処か穏やかな表情をしている。
「私は間違ってなどいなかったんだな…」

そもそもなぜ彼が守護者になってしまったのかと言うと、彼がまだ少年の時に正義の味方なんてものに憧れ、それが他人の夢であり、その感情が偽物だと気付けずに幾度の戦場を両手に握ったその剣で駆け抜け、時には無償で命を救い、更には世界まで救った、自分の事など顧みずに。
彼は死に際に願った、もっと1人でも多くの命を救いたいと。
そして彼は世界と契約し守護者へとなった。
守護者となった彼は人類の滅亡を避ける為に世界の抑止力として人類の敵となるものを殺した。唯ひたすら殺した、大の為に小を切り捨て。
そうして彼はやっと気付く、「俺のなりたかったものはこんなものじゃない」と、こんなものは守護者とは名ばかりの掃除屋だと。だが

時は既に遅く、守護者になってしまった以上辞めることも消えることも許されない。
先程も言ったが、せめて自分の様にはならないように過去の己を殺す事でその過ちを正そうとしたのだ。
だが自分でも忘れていた事を過去の己に思い出させられ答えを得ることができた。
「む、今回の召喚は少しばかり早いな」
アーチャーは自分が召喚されようとしている事に気が付く。
「お次のマスターは一体どれほど運が悪いのだろうな私の様な格の低い英霊なんぞ呼び出して」
自嘲しつつ召喚されたら早速ハズレを引いた運の悪い馬鹿者の顔を拝んでやろうと思いながらエミヤシロウは現世へと召喚されるのだった。

◇

一体何故こんな事になったのだろうか。
僕は唯一の身内であるおじいちゃんが亡くなってしまい途方に明け暮れていたが村の村長さんを始める皆が僕を慰めてくれたお陰で立ち直ることが出来た。そしておじいちゃんが読んでくれてた英雄譚に出てくるような英雄を目指して迷宮都市オラリオに向かっていたはずだ。
だがオラリオ行きの馬車に乗っていただけなのに運悪く狼の群れに襲われてしまった。
周りの人はすぐに逃げたけどノロマな僕は逃げ遅れてしまい狼の群れに囲まれてしまった。
もう何処にも逃げ道なんてない。
僕はまだ夢に挑んでもいないのに死んでしまうのか……

「だ、誰か助けて!!」

さっき逃げた人達は助けには戻って来ないし誰かが助けに来てくれる訳でもない。もうダメなのかな、此処で死ぬのかな……

いや、まだ死ぬ訳にはいかない！そうだ、僕は英雄になるんだ！そして英雄譚の様な出会いをダンジョンでするんだ。

そう、こんなところで立ち止まってなんかいられないんだ。どうせ死ぬのなら英雄の様に戦って死のう。

近くにあった木の棒を拾い上げ僕は立ち上がる。

「さあ掛かってこい、お前らなんか僕が倒してやる！」

そう覚悟を決めた瞬間、目の前に目も開けられない程の光が発せられた。その光には狼達も怯んだようだ。

痛みが走り手の甲を見るとアザのような紋様が浮かんでいる。

光が収まるとそこには白髪で褐色肌そして赤い外套を纏った1人の男が立っていた。

そしてその男は僕にこう言った。

「サーヴァント・アーチャー、召喚に応じ参上した。君が私のマスターか？」

「はい？」

思わず僕は間抜けな声をあげてしまったが誰でもこうなってしまうと思う。

プロローグ後編

「サーヴァント・アーチャー、召喚に応じ参上した。君が私のマスターか？」

現世に召喚された私は最早決まり文句であるセリフを吐いた。
どうやら怯えているようだがマスターの確認を済ませる事が最優先だ。問題の解決は遅くはないだろう

「はい？」

……どういうことだ？何故疑問を浮かべる？この少年が召喚したのではないのか？そうで無かったとしたら生前の私の様に巻き込まれたというのか？

「あの、すいません。よく分からないんですがあなたは逃げて下さい。此処は僕が戦います」

戦うとはあの狼達となのか？魔術師が狼なんぞに遅れを取るとは思えんが。

だが以前の私の様な例外もいるだろう。それに周りには残骸と化した馬車しかなく他に人っ子一人もいない。
やはり彼が私のマスターのようだ

「心配はいらないぞマスター、この程度の獣なんぞ私が屠って見せよう」

「え、で、でも…」

「いいから任せろ」

恐らくこの様な状況からマスターの魔力量はさほど多くは無いであろうから今後の魔力供給には期待しないておこう。幸いアーチャークラスには単独行動のスキルが備わっているから暫くは問題がなかろう。

一先ずは目の前の問題を解決するところから始めるとするか。

「投影開始（トレース・オン）」

私の代名詞と言っても過言ではない干将・莫耶を投影する。正直宝具を投影する必要すらないのだがマスターに私の力を誇示するにはいい機会だ。

さて、さっさと片付けてしまうか。

「さぁ、掛かってこい！」

「ガルゥ……ガァァァァ!!!!!!!!」

……

アーチャーの挑発に乗ったのか全部で7匹の狼達は一斉に襲いかかった。彼が何者なのかは分からないベルにはとても危険な状況に見えた。

「危ないです！逃げて下さい！」

必死にベルは訴えかけるがアーチャーには届かない。寧ろ余裕の表情を浮かべ二対の剣を構えている。

ベルはこれから起こるであろう惨劇から目を背けようとしたがその瞬間に

一閃

そう表すのが正しいであろう。
ベルが目を背けようとする前にアーチャーは既に狼たちの後ろに立っていた。
何が起こったか把握出来ないベルだったが次の瞬間には狼たちはその身を裂かれ血飛沫を上げながら倒れていった。
あまりの出来事にベルには状況を理解することが出来なかったが一つだけアーチャーが狼たちを屠ったという事実だけは理解ができた。

「怪我は無いか、マスター？」

思ってもいなかった出来事にベルはボケっとしていて返事に遅れたがしっかりと自分の安否を報告した。

「おーい、あんた達大丈夫かー？」

遠くから御者が様子を見に近づいてきた。

「あ、はい大丈夫です」

「それはよかったよ……でも馬車がこれじゃオラリオまで乗せられないな、悪いが代金は返すから歩いていってもらえないか？ここの道を真っ直ぐに1時間位歩けば着くはずだからね、本当にすまない」

壊れた馬車を残念そうに見ながら御者はオラリオがある方角を教えてくれた。

一先ず落ち着いたのかベルはアーチャーに頭を下げた。

「えっと…その…助けて下さりありがとうございます！」

「なに、マスターを守るのは私の仕事だ」

「その、さっきから言ってるマスターってどういうことなんですか？」

当然と言えば当然の疑問だ。ベルからすればいきなり目の前に現れた男が自分をマスターと呼び、守る。どう考えても納得のいく理由がベルには思いつかないのだ。

「ふむ、やはり何も知らないか」

「説明をしたいのも山々だが直に日も暮れる。野宿したいなら構わないのだが先ずは目的地に向かった方が良いのではないかね？」

「そ、それもそうですよね…」

「そんな捨てられた子うさぎのような顔をするなマスター。歩きながら軽く説明をしよう」

こうしてアーチャーはオラリオに向かいながらベルに説明を始めた。

「まず君は聖杯戦争や魔術師と言う言葉を聞いたことはあるかね？」

「い、いえ…ですが魔術師じゃなくて魔法使いなら聞いたことがあります！」

「ふむ…そうかそれならば1から説明をした方がいいな」

それからアーチャーはベルに聖杯戦争について、マスターについ

て、聖杯について、そして英霊についての説明した。

「という事はあなたは過去の英雄なんですか!?」

アーチャーの説明にベルは目を輝かせながら質問を投げかけてきた。

「悪いが私は正規の英霊ではなくてね。かのブリテンの騎士王やアイルランドの光の御子と比べられてしまうと劣ってしまう」

アーチャーの発言にベルは首を傾げる。

「騎士王に光の御子…?すいません。僕はよく英雄譚を読むのですがどちらも聞き覚えがありません…」

今度はアーチャーがベルの発言に驚きを露わにする。どちらの英雄も世界的に有名な英雄譚だ。それを英雄譚好きだと言ったこの少年が知らないのはおかしな話だ。見栄を張った可能性もあるが先程の英霊の話の食いつき様を見たら嘘だとは考えられない。

一先ずアーチャーはベルに確認を取る事にした。

「む、ならば君が読んでいた英雄譚とはどう言ったものがあるのだ?」

「そうですね、いくつかありますが僕はアルゴノウトの英雄譚なんか好きですね」

「アルゴノウト…?アルゴー船の話か?」

アルゴー船にはアーチャーが聖杯戦争で対峙したあのバーサーカーがかつて乗ったことのある船だ。これもまた神話では有名所だ。

「船…？アルゴノゥトは愚かな少年がなし崩しに英雄になる喜劇の英雄譚ですよ」

アーチャーは聞き覚えのない英雄譚に足を止め思考を巡らす。

（私が聞いたことの無い話だな…聖杯からの知識のバックアップもされていない。これはどうしたものか…）

「えっと…大丈夫ですか？」

止めていた歩みをまた進めながらアーチャーはある可能性を思案していた。

「なに、気にするな。少し考え事をしていたまでだ」

「それよりもだ。どうやら完全な召喚では無かったためかどうやら私には一部記憶の混濁が見られる。」

「申し訳ないがこの世界の常識や君の目的などを教えてもらえないか？」

現状、アーチャーは英雄譚の話が噛み合わないことにひとつの可能性を考えていた。それを立証すべくベルに質問を投げかけた。

「は、はい！分かりました！」

それからベルは自分に何があったのかを話し、オラリオやダンジョン、神様や冒険者について説明を始めた。

（神の存在やダンジョン…それに冒険者という職業か…やはりここは私の知っている世界では無いようだな）

「あ、あの…」

「ああ、すまない説明をありがとう。それにしても君も大変だったな」

まだ15の歳も取っていない若さで天涯孤独となったベルにアーチャーは過去の自分を重ねて見えていた。だが衛宮士郎には切嗣や大河がいた為ベルの境遇に比べてしまうと自分の置かれていた環境に感謝が浮かぶ。

「いえ大丈夫です！僕はもう前に進むと決めているので」

「そうか…君は強いな…」

おどおどしながらもベルの瞳には強い光が見えていた。それをみたアーチャーは思わず微笑を浮かべる。

「いえ、そんなことないですよ…あ、そう言えばあなたのことはなんと呼べばいいですか？」

「む、私とした事が失礼した。名乗る程の名は無いのでな。アーチャーとでも弓兵とでも呼んでくれ」

「分かりました！ではアーチャーさんと呼びますね」

「僕はベル・クラネルです！よろしくお願いしますね！」

ベルは屈託の無い笑顔を浮かべ手を差し出してきた。またも思わずアーチャーは微笑を浮かべてしまう。

「ああ、こちらこそよろしく頼むよマスター」

1話～ギルドを探して～

1話～ギルドを探して～

「マスター、これからどうするのかね？」

「えっと…まだ何も考えてません…」

あれからオラリオに到着した2人。アーチャーの見立てでは日が暮れる頃にオラリオに着くとは思っていたのだがベルが想像していたより健脚であった為まだ昼過ぎの時間帯に門を潜ることが出来た。

だがこれからの方針がまだ決まっていない2人は宿を先に探すべきかどうか話し合って決めている所だ。

「まずは冒険者というやつになるのだろう？」

「そ、そうですね！まずはギルドに言った方がいいのかなぁ」

「ギルドというと同業者組合みたいなものか。そうだなまずはギルドで話を聞いてから方針を建ててみてはどうだ？宿もギルドに聞けば案内があるかもしれないしな」

「な、なるほど！そうですね！それじゃあ行きましょう！」

一先ずギルドに向かうことになったのだが2人はオラリオに来たのは初めてでギルドの位置が分からない。

探し歩いて30分、意気揚々と進むベルの後ろにアーチャーはひたすら着いてきたのだが未だにギルドには辿り着かない。

当然と言っては当然なのだがてっきりベルがギルトの位置を知っているかと思っていたアーチャーは少し顔が引きつっている。

「ご、ごめんなさいアーチャーさん！実はギルドの場所が分かりません！」

（考えれば知らないのも無理もないな…しかしそんな簡単なことも思いつかなかったとは遂にあかいあくまのうっかりでも移ったか…？）

元マスターに心の中で毒を吐くアーチャー。その時に別の世界で優秀だがここ一番で伝家の宝刀であるうっかりを発動する少女がどデカいくしゃみをかましたのはまた別の話だ。

「なに、気にするなマスター。それならば人に聞こう」

アーチャーは思わずため息を吐きそうになるが必死に謝ってくるベルを見てため息を止める。だが路地裏の方に迷い込んでしまった為に周りに人がいない。

「まずは人を探しましょう…」

「ふむ、そこの角を曲がったところに人がいると思うぞ」

アーチャーは周りの気配を探ったところすぐ近くに人がいたのでベルに報告をした。

「えぇ!?なんで分かるんですか!!?」

「なに、簡単な話人の気配がしていただけだよ」

「英霊って凄いんですね…」

「大した事じゃないさ、君も努力を続けたらできる」

「が、頑張ります…！」

２人が会話を続けながら道の角を曲がるとそこには実際に人がいた。腰に剣を携え白いノンスリーブワンピースを来た長髪の女性が歩いていたその長髪は金色に輝いておりとても神秘的な雰囲気を醸し出している。

「すごい！本当に人がいましたよ！」

アーチャーの言った通りに人がいた事に驚くベルに対してアーチャーは驚いた表情を浮かべている。

「セイ……バー!?」

アーチャーの零した言葉に少女は振り返った。

2話～剣姫との邂逅～

2話～剣姫との邂逅～

アーチャーは曲がり角にいた人物を見てつい生前に聖杯戦争を共に戦い抜いた気高く美しい騎士王と勘違いをしてしまった。

だがよくよく見ると彼女の凛とした態度と比べる柔らかな感じが伝わってくる。

「私はセイバーさんじゃ無いよ…？」

「あぁ…すまない…知り合いに雰囲気が似ていてついね」

人違いに少し焦りを見せたが直ぐに謝罪を述べるアーチャー。だが焦っていたのは間違いではなく少女の発言の違和感には気が付かない。

「私はアーチャーという。人違いをした所申し訳ないが道を尋ねたいのだが構わないか？」

「私はアイズ・ヴァレンシュタインです。どこに行きたいんですか？」

「あぁ、私たちは実は今日初めてオラリオに訪れてね。ギルドを探しているんだが道に迷ってしまって」

「ギルドならそこの道を右に曲がれば大通りに出るので真っ直ぐ進めば着きますよ。ところで…」

道を尋ねたアーチャーに快く答えたアイズがアーチャーの後ろに顔を真っ赤にして俯いて隠れているベルの方を見ながら質問をした。

「その子はどうしたんですか…？」

「ぼ、ぼぼぼ僕ですか!?」

ベルの慌てる様子を見て状況を察したアーチャーはニヤリとしながら答えた。

「フッこの子はベル・クラネル。私の弟でね。人見知りが激しい子なんだ、許してくれ」

「!?」

「弟…あまり似てないんですね」

弟と紹介された事に驚いたベルだが2人の顔を交互に見ているアイズと目が合ってしまい恥ずかしさからつい目を逸らしてしまった。

そんなベルの様子に呆れながらも苦笑いを浮かべるアーチャー

「まぁ、腹違いというやつでな、あまり深くは触れないでくれ。それよりも引き止めて引き止めてすまなかったな。道を教えてくれた恩は何時か返そう」

「道を教えただけなので気にしないでください…気持ちだけで充分です」

「そうか…ありがとう。では我々はもう行くとするよ」

アイズにお礼を告げたアーチャーはベルを引っ張りながらギルドへと向かう。

「マスター。あの少女に一目惚れでもしたか？」

アーチャーがニヤリとした表情でベルを揶揄う。その顔付きは元マスターだった赤い悪魔が衛宮士郎を揶揄う時に浮かべていたものと全く同じだ。

「うぅ、はい…物凄く綺麗で緊張しちゃいました…」

「フッ君もまだ若いな。だが彼女を落とすとなると中々骨が折れそうだぞ？」

「やっぱり…僕なんかじゃ釣り合わない位綺麗でしたもんね…」

アーチャーの言葉にあからさまに肩を落とすベルだったがその様子を見てアーチャーはヤレヤレと言った表情を浮かべる。

「確かに彼女は凄まじい美貌だがそうではなくかなりの実力者だぞ？」

「え!?そうなんですか!?」

「あぁ、間違いない。君はダンジョンで女性を助けて恋仲になりたいのだろう？今の君じゃ助けられる側になってしまうな」

「そうですか…僕追いつけますかね…」

「さぁ、それは分からないが何もしなければ始まらないんじゃないのかね？」

ベルを揶揄いすぎたなと思ったアーチャーは励ますように声を

かける。その言葉を聞いたベルはワナワナと震えて叫ぶ。

「分かりました！僕はアイズ・ヴァレンシュタインさんを守れるぐらい強くなります！」

「そうか、やる気が出たならまずは冒険者になる為にさっさとギルドへと行ってしまおうか」

「はい！」

こうして２人はギルドへと向かうのであった。